

大元神社古墳発掘調査報告書  
— 総括編 —

2008年8月

高知大学人文学部考古学研究室

高知大学考古学調査研究報告第5冊

大元神社古墳発掘調査報告書  
— 総括編 —

2008年8月

高知大学人文学部考古学研究室

## 例 言

---

- 1 本書は高知県香美市上佐山田町楠目に所在する大元神社古墳の発掘調査報告である。
- 2 当古墳は、今回の調査を含めて3回の調査が行われている。2005年の測量調査、2006年と2007年の発掘調査である。
- 3 本書は2007年の調査を主として報告するが、2006年度の調査報告において一部の図面の方位に誤りがあったので、2006年度成果もあらためて掲載し、総括編として発行する。
- 4 当古墳におけるすべての調査は、高知大学人文学部人間文化学科考古学研究室が主体となって実施した。調査は、清家章（人文学部教授）が担当した。
- 5 2005年度の調査は高知大学人文学部学部長裁量経費を使用し、2006年・2007年度調査の実施及び本書の発行については日本学術振興会科学研究費基盤研究(B)「弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究」の一部を使用している。
- 6 2007年度調査の期間は8月19日から9月20日である。
- 7 写真の撮影は清家が主として担当した。
- 8 挿図のうち、図1～3・35・37の方位は真北を示し、その他の方位は磁北である。標高は海拔を示す。
- 9 図3は国土地理院発行の5万分の1地形図を、図35は2万5千分の1地形図を利用した。
- 10 土器実測図のうち、須恵器は断面を黒塗り、土師器は白ヌキとし、陶磁器はアミを入れて区別している。
- 11 2007年度調査には高知大学人文学部考古学ゼミ生ならびにその卒業生と人文学部1～2年生が参加した（学年は調査当時）。参加者は以下の通りである。桥家豊・中井紀子・渡邊可奈子（以上、卒業生）、鈴江祐・矢部俊一・岡本治代・佐伯麗・白川聰子・馬場省吾・堀内淳矢・吉川裕子・高山沙織・玉井沙良・永元智宣・新名悠・渡邊峠・大谷智恵・小川真人・嶋圭太・妹尾佳奈・原明恵・田村明子・末永知美・山崎香菜恵・渡邊早苗・岡田真知・今木千鶴・藤田香代子・村上裕紀（以上、高知大学学生）。なお、整理作業には考古学ゼミ生の多くがこれに参加したが、渡邊可・鈴江・矢部・馬場・岡本・高山・玉井・永元・新名がその中心を担った。
- 12 調査の実施にあたり、小野寺弥・甲藤栄一・小林麻由・廣田佳久・藤岡敬一郎・松田直則・森田尚宏・山本哲也・植部落の皆様・大元神社・株式会社トヨタ部品四国共販高知支店・香美市教育委員会・高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター・前行部落の皆様・八王子宮（個人・団体の順。五十音順。）より、多大なご協力をいただいた。
- 13 本書の執筆は、清家・岡本・橋家・矢部・渡邊可が担当した。分担は文末に示した。
- 14 本書の編集は清家が担当した。

## 目 次

---

第Ⅰ章 調査経過	1
1 周辺の遺跡	1
2 大元神社古墳の立地と周辺の古墳	2
3 調査の経緯と経過	4
第Ⅱ章 調査成果	7
1 調査区の設定	7
2 墳丘の調査成果	7
3 石室調査区の成果	17
第Ⅲ章 出土遺物	27
1 出土遺物の種類	27
2 古墳時代の遺物	27
3 古代以降の遺物とその意義	33
第Ⅳ章 考察：土佐山田における古墳築造と大元神社古墳	37
はじめに	37
1 土佐後・終末期古墳における大元神社古墳の位置	37
2 高知平野の古墳展開	41
3 土佐山田における古墳展開と大元神社古墳	41
おわりに	44
第Ⅴ章 まとめ	47

## 図版目次

図版	図版
1 1 古墳の立地	6 1 石室調査区全景（西から）
2 調査前の状況	2 石室調査区（南から）
2 1 1トレンチ（東から）	7 1 石室調査区全景（北から）
2 1 トレンチ（西から）	2 石室石材掘削後の状況
3 2 トレンチ（南から）	3 0mライン東側土層（南から）
4 2 トレンチ（北から）	4 0mライン西側土層（南から）
3 1 3トレンチ（西から）	8 1 崖面調査区東セクション
2 3 トレンチ（東から）	2 崖面調査区西セクション
3 2 トレンチ検出溝（西から）	9 1 石室調査区西壁区
4 3 トレンチ検出溝（北から）	2 石室調査区東壁区
4 1 2トレンチ拡張区（北から）	10 出土須恵器1
2 2 トレンチ拡張区（南西から）	11 1 出土須恵器2
5 1 4トレンチ（南東から）	2 出土須恵器3
2 4 トレンチ（北西から）	12 1 出土須恵器4
3 5 トレンチ（南西から）	2 出土須恵器5
4 5 トレンチ（北東から）	13 古代以降の土器

## 挿図目次

図1 大元神社古墳の位置（鈴江製図）	1
図2 大元神社古墳の立地（大森麻衣子・清家製図）	2
図3 周辺の主な古墳（清家製図）	3
図4 測量調査風景（2005年度）	5
図5 2005年度調査の1コマ	5
図6 発掘調査風景1（2006年度）	5
図7 2006年度調査の1コマ	5
図8 発掘調査風景2（2007年度）	5
図9 発掘調査風景3（2007年度）	5
図10 遺物出土状況（2007年度）	5
図11 2007年度調査の1コマ	5
図12 調査区配図図（馬場・清家製図）	8

図13 大元神社古墳・大元神社北古墳填丘測量図（鈴木誉也製図）	9～10
図14 1トレンチ平面図・土層断面図（白川製図）	11
図15 2トレンチ平面図・土層断面図（吉川製図）	12
図16 2トレンチ拡張区平面図・土層断面図（高山製図）	13
図17 3トレンチSK1検出状況	14
図18 3トレンチ平面図・土層断面図（佐伯製図）	14
図19 4トレンチ平面図・土層断面図（岡本製図）	15
図20 5トレンチ平面図・土層断面図（矢部製図）	16
図21 填丘復元図（清家製図）	16
図22 石室調査区・区割り設定図（清家製図）	17
図23 石室調査区平面図（清家製図）	18
図24 石室調査区縦断・横断土層図（ヰ井製図）	19
図25 壺掘坑	20
図26 残存石室石材平面・立面図（岡本製図）	21
図27 東西セクション・0mライン土層断面図（渡邊可製図）	23
図28 東壁区・西壁区土層断面図（高山製図）	24
図29 須恵器実測図（渡邊可製図）	27
図30 子持器台実測図（渡邊可製図）	29
図31 透穴を塞いだ痕跡	32
図32 子持器台復元図（渡邊可製図）	32
図33 古代～中世土器実測図（岡本製図）	33
図34 近世土器実測図（岡本製図）	34
図35 土佐山田における主な古墳（清家製図）	38
図36 填丘規模と石室規模の対応（清家製図）	39
図37 高知平野の特大型・大型古墳の分布とティセンボリゴン（清家製図）	42

# 第Ⅰ章 調査経過

## 1 周辺の遺跡

大元神社古墳は香美市土佐山田町楠目に所在する。香美市土佐山田町は南国市及び高知市から見て北東方向にあたり、現在においても香川県・徳島県方面に向かう上での重要な交通ルートとなっている。現在の土佐山田町の中心街は高知平野北東部、物部川によって形成された河岸段丘上に位置し、大元神社古墳はこのような河岸段丘の北に広がる四国山地系の山々の麓付近に位置している。

土佐には、古墳時代前半期に属する古墳は極めて少なく、また明確な前方後円墳も未だ確認されていない。前半期にさかのぼる可能性を持つ古墳は、幡多地域には宿毛市高岡山古墳群と宿毛市曾我山古墳群、高知平野には、南国市長歟2号墳と南国市狹間古墳などがわずかにあるのみであり、よって、土佐の古墳のほとんどは横穴式石室を内包する後期古墳である。

高知平野においては南国市を中心とする高知平野東部地域に主に古墳が分布する(図3)。高知平野において最も古い横穴式石室を有する古墳は南国市に所在する長歟4号墳であり、TK10型式期の須恵器を出土している。その後、南国市には蒲原山古墳群、高知市には高間原古墳群などが続いて造営され、土佐山田町では県内で唯一埴輪を持つ伏原大塚古墳が築造された。

その後、TK43型式期からTK209型式期にかけて高知平野の北東部に広がる丘陵上に多くの横穴式石室墳がつくられる。南国市においては高知県最大規模の古墳群である舟岩古墳群や、土佐三大石室のひとつである小蓮古墳などがその代表として挙げられるが、この時期には土佐山田町においても大規模な横穴式石室と金銅装の馬具などをもつ新改構走古墳をはじめとして上改田古墳、前行山古墳群など、比較的多くの横穴式石室墳が造営される。

今回調査した大元神社古墳は、墳丘の規模や石室に使用された石材などから高知平野における後期古墳築造の流れから大きく外れるとはないものと考えられ、未調査の古墳が多い土佐山田町の古墳の様相を知る上で重要である。

(耕家)

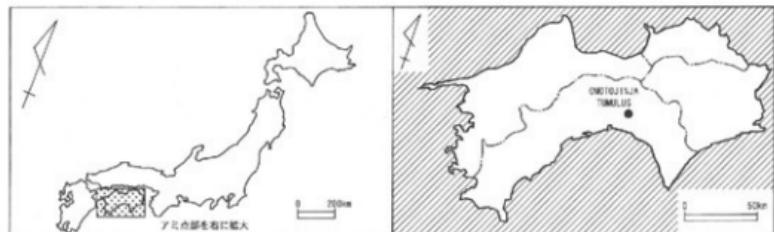


図1 大元神社古墳の位置

## 2 大元神社古墳の立地と周辺の古墳

**大元神社古墳の立地** 大元神社古墳は、土佐山田ゴルフクラブが存する丘陵のさらに南にある丘陵上に存在する（図2）。土佐山田ゴルフクラブのある丘陵から南西と南東方向に尾根が伸びており、その中央部分は扇状地形を呈している。その扇状地形の付け根部分に、古墳のある丘陵は位置している。古墳のある丘陵の西側の麓には流路が走り、東側は丘陵の裾部を道路が走って東側にある集落と繋いでいる。古墳のある丘陵は水田に囲まれ、独立丘陵状に現状では見えているが、もともと北西の丘陵から派生した尾根であった可能性もある。大元神社古墳は、この丘陵の最高所よりもやや西に偏した大元神社社殿の北側に存在する。 （清家）

**大元神社古墳周辺の古墳** 大元神社古墳は前行山古墳群の中に含まれ、大元神社古墳それ自体も前行山3号墳と呼ばれていた（廣田1979）。前行山古墳群は、前行山1号墳・2号墳（消滅？）・大元神社古墳（3号墳）・大元神社北古墳（4号墳）・5号墳・神母古墳から構成され、大元神社古墳はその中でも最も眺望の良い小丘陵の頂点に位置し、規模が大きい。前行山古墳群以外にも前行桜ヶ谷1号墳・前行桜ヶ谷2号墳が周囲にあり、県下最大の伏原大塚古墳は本墳の南東約1kmに所在する。 （清家）

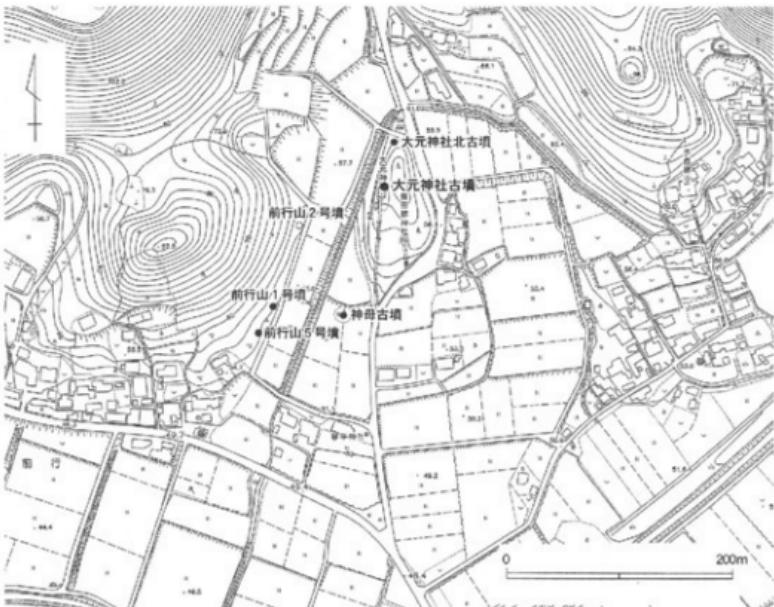


図2 大元神社古墳の立地

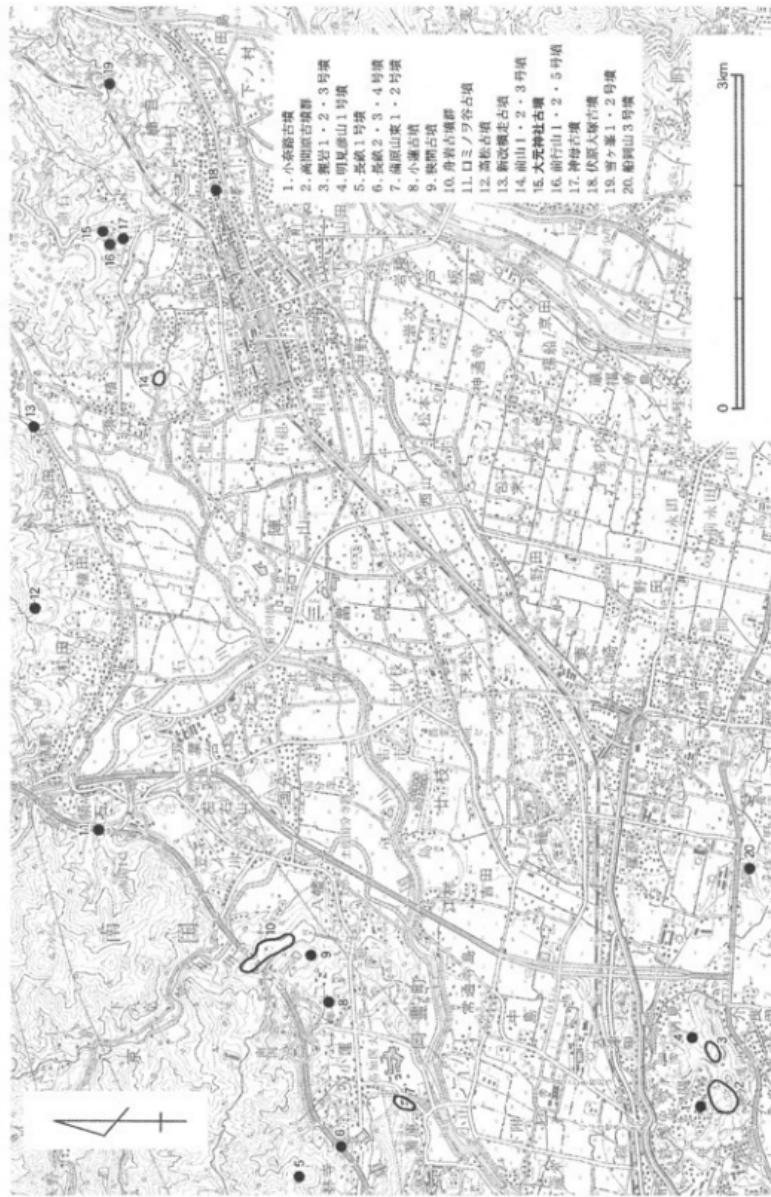


図3 周辺の主な古墳

### 3 調査の経緯と経過

**調査の経緯** 高知大学考古学研究室では、2004年より高知の後期古墳を継続して調査を行ってきた。大元神社古墳もその一つで2005年7～8月に測量調査を行い、その成果を2006年3月に報告したところであった（高知大学編2006）。また、研究室代表の清家は、一昨年度より科学研修費「弥生・古墳時代における太平洋ルートの文化交流と地域間関係の研究」の交付を受け、後期古墳の墳丘・石室・副葬品などから南四国を中心とした交流について調査と研究を進めることになったのである。

大元神社古墳は、石室こそ破壊されているものの墳丘は良好に保たれていることが測量調査の結果明らかとなっていた。また、大元神社古墳の周辺には、高知最大の古墳である伏原大塚古墳がある（図3）。伏原大塚古墳は大形方墳であり、高知で唯一埴輪を持つ。また、おそらく特大型あるいは大型の横穴式石室を埋葬施設を持つ初期の古墳である。埴輪が導入された経緯は高知だけの事情では説明できず、他地域からの影響が存在したことを示唆する。また、伏原大塚古墳は方墳であること、蘇我氏の影響が強く認められる高知では重要な点であり、畿内との交流を考える上できわめて重要である。大元神社古墳は伏原大塚古墳の次世代の首長墓であると考えられたため、伏原大塚古墳で認められた他地域との関係が持続するのかどうかを明らかにすることは、南四国における地域間交流を研究する上で重要と考えられた。あるいは本古墳を調査することで地域間交流を示す新たな資料が得られることが期待された。（清家）

**2006年度の調査** 以上のことから、科学研究費による調査対象として本古墳を選択し2006年度から発掘調査を開始した。2006年度は主に墳丘調査を行った。墳丘に3つのトレンチを設定し、第2・第3トレンチから周溝と思しき溝が検出され、本古墳は直径18mの円墳である可能性が考えられた。その成果はすでに報告（高知大学編2007）にまとめてあるが、方位の一部に誤りがあったことが、報告書刊行後明らかとなった。また、2007年度の調査によつて、新知見が加わった調査区もでてきたので、あらためて本書にて2006年度調査成果を報告し直すこととした。以後、2006年度調査成果についても本書の記述を採用されたい。（清家）

**2007年度調査の経過** 2007年度は、2006年度の調査結果を受けて墳丘規模と墳形を確認するため新たに2本のトレンチ（第4トレンチ・第5トレンチ）を設定し、昨年度調査した第2トレンチの一部を拡張して（第2トレンチ拡張区）、古墳の周溝を検出することに努めた。また、石室の遺存状況を確認し、石室の下部が残っているのであればその形態と構造を明らかにするため、コ字状にえぐられた墳丘中央部にも調査区を設けた（石室調査区）。調査は清家が担当し、作業には高知大学人文学部学生が参加した。参加者は例言に示したとおりである。

2007年度の調査は、8月19日から開始した。例年にない酷暑の中で調査は行われた。墳丘の各調査区は、2006年度の経験が活きて順調に作業は進んだ。



図4 測量調査風景（2005年度）



図5 2005年度調査の1コマ



図6 発掘調査風景1（2006年度）



図7 2006年度調査の1コマ



図8 発掘調査風景2（2007年度）



図9 発掘調査風景3（2007年度）



図10 遺物出土状況（2007年度）



図11 2007年度調査の1コマ

## 6 調査の経緯と経過

石室調査区は、墳丘盛土の堆積状況や石室構築過程、あるいは石室がどの程度遺存しているかを明らかにするため、まず調査区周囲のコ字状の壁を精査することから作業を始めた。壁面には樹木の根が入り込んでいたため、壁表面は土壌化が進み、土層を観察するためには、壁面をかなり厚く削る必要が出てきた。しかし、壁表面を厚く削ることは墳丘それ自体を損なう行為でもある。また、輩出する土量も多くなるため、土層観察のための掘削と精査は、調査区南端からC0杭北2mまでにとどめた（第II章参照）。

当初は、平面的にも石室調査区全面を掘削する予定であった。しかし、予想以上に土砂が堆積していることが判明するとともに、石室は壊滅的打撃を受けていることが調査途中で明らかとなった。加えて例年ない酷暑の中で、調査員の疲労は極限にまで達していた。そこで、当初の方針を変更し、石室調査区の内、南半つまりC0杭から北2mラインまでは完全に掘削し、それより北側では西半部のみを掘削し、東半分は掘り下げを途中で止めることとした。つまり、石室調査区はその4分の3を掘削したということになる。なお、後日の再調査のために土層観察用の畦は壊さず、そのまま残してある。

このように変更を余儀なくされたが、後述するように石室の形態を推測する手がかりを得るとともに、墳形・墳丘規模・築造時期が判明するなど当初の調査目的は達せられた。

実測や写真撮影などのすべての記録作業を終了した後、石室調査区は土嚢を使用して埋め戻した。墳丘の各調査区は遺構部分のみ土嚢で保護し、その上から排土を被せて埋め戻しを行った。埋め戻しと平行して宿舎の撤収を行い、9月20日にすべての作業は終了した。（清家）

**謝辞** 調査を遂行するにあたり、遺跡ならびに合宿所周辺の皆様・関係諸機関には多大なご協力をいただきました。ご芳名を記して心よりお礼を申し上げます。

小野寺弥・甲藤栄一・小林麻由・廣田佳久・藤岡數一郎・松田直則・森田尚宏・山本哲也・植部落の皆様・大元神社・株式会社トヨタ部品四国共販高知支店・香美市教育委員会・高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター・前行部落の皆様・八王子宮（個人・団体の順。五十音順。）  
（清家）

### 参考文献

- 高知大学考古学研究室編 2006『大元神社古墳調査報告書』高知大学考古学調査研究報告第2冊 高知大学人文学部考古学研究室、高知
- 高知大学考古学研究室編 2007『大元神社古墳発掘調査報告書』高知大学考古学調査研究報告第4冊 高知大学人文学部考古学研究室、高知
- 廣田典夫 1979「考古篇」『土佐山田町史』土佐山田町教育委員会、高知：pp. 37-154

## 第Ⅱ章 調査成果

### 1 調査区の設定

**墳丘調査区の設定** 古墳中心部は石材の抜き取りのためコ字状に大きくえぐられるように破壊され、墳丘の南半部も社殿建築のため大きく削平されている。しかし、墳丘北半は人為的な影響を受けた形跡がなく、墳丘の原形を残している可能性が測量図(図13)からは認められた。そこで、2006年度には、墳丘北半に1~3トレンチを設け、2・3トレンチから墳丘裾と思われる周溝を検出した。2007年度は2006年度の成果をふまえ、墳形と墳丘規模を明確にする情報をさらに得るため、2006年度に設定したトレンチの間に新たに2本のトレンチを設けた(図12)。すなわち、1トレンチと2トレンチの間に4トレンチ、2トレンチと3トレンチの間に5トレンチを設定したのである。また、2トレンチでは墳丘裾を画すると考えられる溝が検出されたが、2007年度ではその部分を東側に拡張して、溝の方向を確認した。この拡張した箇所を2トレンチ拡張区と呼ぶ(図12)。

(清家)

**石室調査区の設定** 先述の通り墳丘の中心部は、石取り作業のためとされる掘削のため、大きく破壊されている。ここは長さ8m・幅4mにわたって大きく削り込まれてコ字状の崖面をなしている。この削平部の最奥部には、長さ1.8m・幅80cmの石が露出しており、横穴式石室の奥壁かあるいは天井石であろうと以前から推定されていた(図版1-(2))。2006年度の調査では削平部の南側壁面(東セクション・西セクション)を観察するに留まったが、2007年度はコ字状の崖面を精査し、なおかつ削平された箇所を掘削して、埋葬施設の残存状況ならびにその形態と構造を明らかにしようと試みた。この調査区を石室調査区と呼ぶ。調査前の計画ではコ字状の崖面をすべて精査して土層の堆積状況を確認し、さらに平面も全面的に掘削する予定であったが、その計画を変更したことは前章に記した通りである。結果的に、コ字状の崖面のうち西側と東側の南端から約2mずつを精査するにとどまり、平面的な掘削についても調査区の4分の3を掘削するにとどまっている(図22・23)。

(清家)

### 2 墳丘の調査成果

**1トレンチ** 1トレンチは墳丘の西側に設置した長さ5m・幅1mの東西に長いトレンチである(図14)。墳丘中央部にある削平部が埋葬施設とはほぼ同じ方向に掘削されているとすれば、その長軸方向に対してトレンチの長軸はほぼ直交する(図12)。

表土を掘削すると、盛土の流出土層と思われる土層が20~30cmの厚さで全面に堆積していた(図14-2~10層)。それを掘削するとトレンチの東半部において明黄褐色のきわめてしまった土(11層)を検出した。2~4層よりも土が均質でしまりが良く汚れがないことから墳丘盛土

と判断した。ただ、11層の直上に堆積していた4層は、後述する崖面調査区西セクションの10層（図27）と類似していたので、これも盛土の可能性はある。ただ、4層は崖面調査区西セクション10層の土に比べるとしまりが悪かったので、盛土が流出した層であると判断した。トレーニチの西半では盛土を検出することはできず流土層直下から地山面を検出した。11層はトレ



図12 調査区配図



図13 大元神社古墳・大元神社北古墳埴丘測量図(アミ点部は崖面)

チの東端から西へ1.9mまでの範囲で検出されたが、11層が途切れた箇所からさらに30cm西の地点、つまりトレンチ東端から2.2mの地点で地山が崖状に落ち込む箇所を検出した。この地山の崖面の西側には幅50cm・標高63.1~63.2mの平坦面が観察されている。この平坦面西側では地表面が再び緩やかに降っていき、墳丘西側の崖に続していく様子が認められた。

当調査区で観察された地山は、崖状の落ち込み部以外は緩やかな傾斜を保っている。そのような状況から考えると、地表面が崖状に落ち込む箇所は、自然地形とは考えがたい。その西側に平坦面が存在することも不自然である。墳丘の裾部を画するために地山を削り出したものと理解する事が適切な解釈であると思われる。この調査区から遺物は出土しなかった。（清家）

**2 トレンチ** 墳丘の北側に設けた長さ7.5m・幅1mのトレンチである。表土層とその直下の盛土流土層（図15-2・3・6~8層）を掘削すると調査区の南端から80cm北までのところで古墳盛土（図15-4・5層）を検出し、それより北では地山を検出した。墳丘の北半は地山を削り出し、上部のみが盛土で構成されているものと思われる。

トレンチのほぼ中央部からトレンチを横断する幅約50cm・深さ約25cmの溝が検出された。この溝の北側には幅約80cmの平坦面が検出された。平坦面の標高は63.6~63.7mである。平坦面のさらに北側は緩やかに丘陵裾に向かって降っていく。このトレンチ中央部で検出された溝か

- 1. 7.5YR4/2黒褐色極細粒砂
- 2. 10YR4/6褐色極細粒砂(中礫1%)
- 3. 10YR4/6褐色極細粒砂(中礫1%)
- 4. 7.5YR5/6明褐色極細粒砂(中礫7%大礫1%)
- 5. 7.5YR5/3C.ぶい褐色極細粒砂(10YR7/2C.ぶい黄褐色極細粒40%)
- 6. 7.5YR8/4浅黄色極細粒(7.5YR8/1灰白色礫15%)
- 7. 7.5YR8/4褐色極細砂(7.5YR8/3浅黄褐色礫15%)
- 8. 7.5YR6/8褐色極細砂(10YR7/6明褐色礫7%)
- 9. 10YR4/4黄褐色細砂
- 10. 5YR5/8明赤褐色粗砂(5YR7/4にぶい褐色礫10%)
- 11. 7.5YR5/6明褐色極細粒砂(中礫1%)。1:表土、2~10:流土、11:盛土。

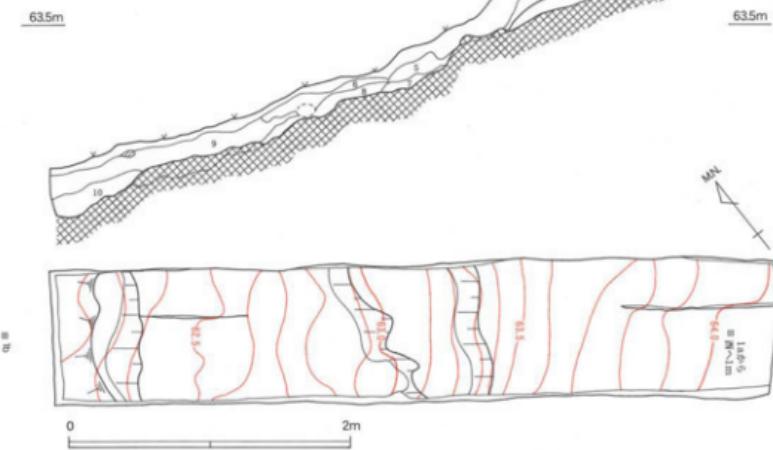
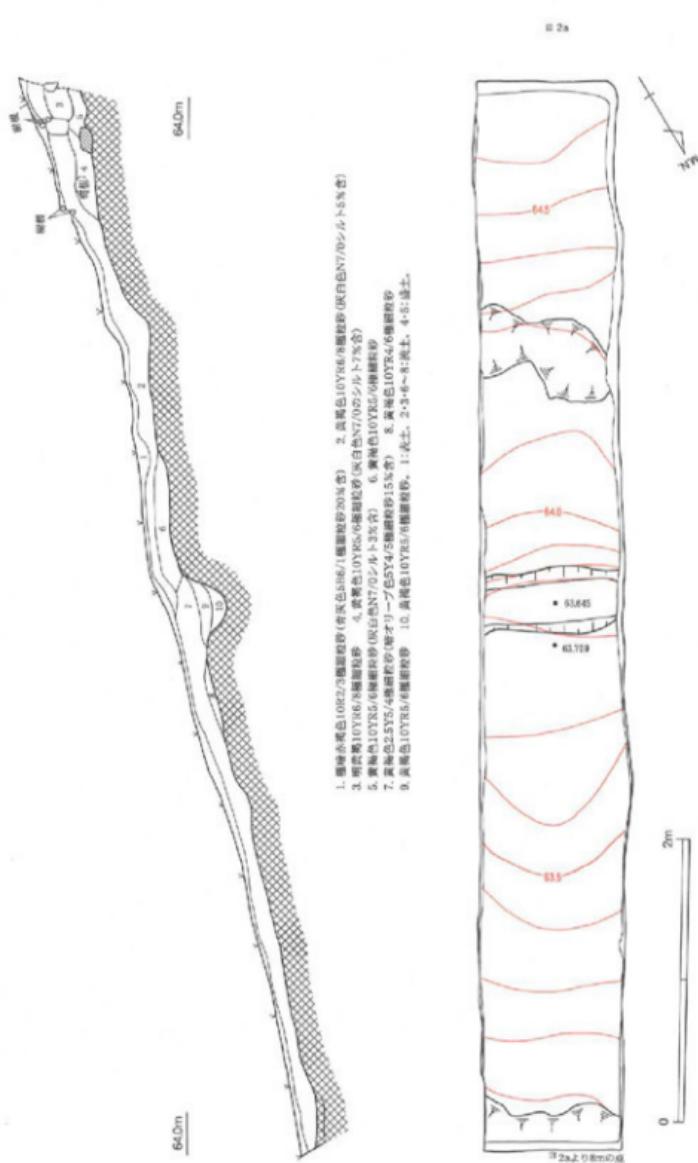


図14 1 トレンチ平面図・土層断面図



らは、古墳と関連する遺物は何も出土しなかったが、後世の遺物も出土していない。(清家)

**2トレンチ拡張区** 2006年度に2トレンチで墳丘を画すると考えられる溝を検出したが、それがどの方向へ続くかは墳形と墳丘規模を確定するために不可欠と考え、2007年度に溝周辺を東へ拡張して新たな調査区を設定した。これが2トレンチ拡張区である。2.3m四方の正方形を呈する(図16)。2トレンチと堆積土層は類似しているので、その詳細は省くが、地表下約25cmで地山面を検出した。予想

通り、2トレンチで検出した溝の続きをトレンチ上半で検出した。溝上端は根の搅乱でやや浸食を受けているので分かりにくいか、やや弧状を呈する溝である。溝幅は50~75cm、深さは15~20cm。溝の北側には幅約80cmの平坦面が認められ、さらにその北側は再び地山面が下降する。溝の埋土を含めこのトレンチから遺物は出土しなかった。

(清家)

**3トレンチ** 墳丘の東側に設置した長さ3.8m・幅1mの東西に長いトレンチである(図18)。墳丘の東側は、丘陵裾から神社社殿へ向かう裏道が通っているためか、墳丘が部分的に削平され平坦な地形を呈している。この平坦面にトレンチを設置した。トレンチの中央やや東よりのところでは、先述した裏道を設置するための段差がトレンチにかかっている。

表土を除去するとトレンチ北端で不整円形の土坑SK1が検出された。SK1は、トレンチ外に広がるので規模等は不明であるが、深さは20cm程度である。SK1からは、一辺40cm弱・厚さ約15cmの平石が2個と拳大の礫が複数検出されたが、他に出土遺物はなく性格不明である(図17)。表土直下から掘削されていること、埋土が汚れていることとあわせ、トレンチのある地点は墳丘が削平されて平坦地となっているところであるので、後世の掘削である可能性が高い。SK1の図面と写真撮影を行った後、さらに掘削を続けたところSK1の東側、トレンチ西端から1mの地点で幅約70cm・深さ約20cmの溝が検出された。溝の上端の標高は約64.0mである。この溝のさらに東側には幅50cm以上の平坦面が観察されている。この平坦面の東側は、先述した裏道のため、地山まで削平を被っている。溝は第5層下(図18)から掘削され、SK1より層位的に

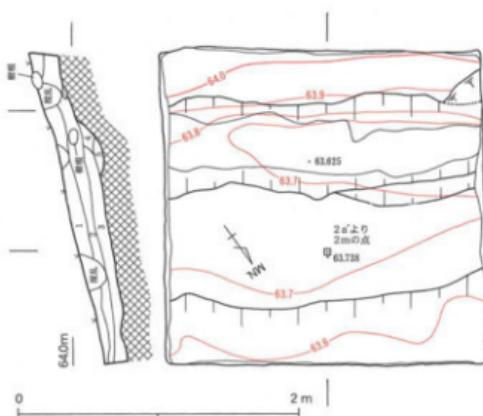


図16 2トレンチ拡張区平面図・土層断面図

1. 表土10YR6/1褐色細粒砂(10YR8/3細緻10%) 2. 10YR7/4にぶい黄橙褐色細粒砂(10YR8/2灰白シルト塊10%) 3. 5YR5/6明赤褐色細粒砂(5YR5/3細緻10%) 4. 5YR6/6暗シルト(5YR6/6粗粒砂) 5. 5YR4/3にぶい赤褐色シルト(5YR5/3にぶい赤褐色粗粒砂)



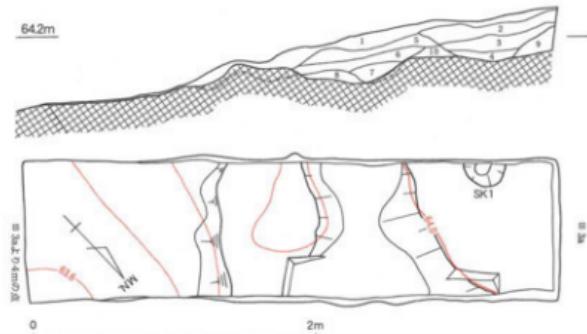
図17 3トレンチSK 1検出状況

古墳据部の東側が高くなつたのであらう。

(清家)

**4 トレンチ** 墳丘の北西部、1トレンチと2トレンチのほぼ中間に設定した長さ3m・幅1.5mのトレンチである(図19)。表土層と流土層を掘削したところ、表土下20cmで地山を検出した。古墳盛土は検出されなかつた。地山面はトレンチ南端から北へ向かって緩やかに傾斜するが、トレンチ南端から1.5mのところで、傾斜角度がやや急になる変換点がある。その傾斜変換点より北側は平坦面をなす。平坦面の標高は約63.3mである。この平坦面がどこまで続くかを調べるため、トレンチを一部北側へ拡張したところ、平坦面の幅は約1mであることが判明している。平坦面よりさらに北では、地山面は再び下降し、そのまま古墳の西側にある崖面へ続いていくものと思われる。

このトレンチでは2・3・5トレンチで検出されたような溝は検出されなかつた。1トレン



1. 表土 2. 明赤褐色5YR5/5/6細粒砂 (塊状砂礫1合含) 3. 黄褐色10YR4/6細粒砂 4. 黄褐色10YR7/8細粒砂  
5. 明褐色7.5YR5/6細粒砂 6. 明褐色7.5YR5/6細粒砂 7. 黄褐色10YR7/8細粒砂 8. 明黄褐色10YR5/8細粒砂  
9. 明褐色7.5YR5/6細粒砂 10. 明赤褐色5YR5/6細粒砂 2~4: SK1埋土 5: 流土 6~8: 溝埋土 9~10: 盛土。

図18 3トレンチ平面図・土層断面図

古いことが壁面から確認されている。溝の規模ならびに墳丘から見て溝の外側に平坦面が存在する状況は、2トレンチと同拡張区で検出された溝と類似する。出土遺物はなかつたものの、墳丘を画する溝の可能性が高い。溝の標高は、1トレンチにおける平坦面と2トレンチの溝の標高よりも高いが、後述するよろに古墳が存する地点は東側がやや高いといふ旧地形が復元される。その地形に起因して

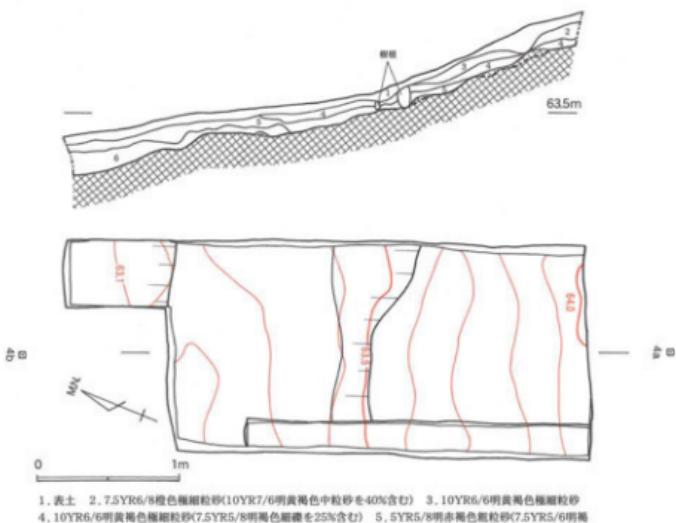


図19 4トレンチ平面図・土層断面図

チにおいても溝は検出されず、傾斜の変換と平坦面が認められた。おそらく墳丘の西側は、溝が巡っておらず、地表面を削って平坦面を作ることで墳丘の裾を画していたと考えられる。遺物は出土しなかった。  
(清家)

**5 トレンチ** 墳丘の北東、2トレンチと3トレンチの間に設定した長さ3.0m・幅1mの、南北から北東方向に伸びるトレンチである(図20)。表土を掘削すると盛土流失層と思われる土層が10~20cmの厚さで全面に堆積していた(図20-2・4~6層)。これを掘削すると、地表面が検出された。地表面において、トレンチ西端から80cmのところで幅約50cm・深さ約10cmの溝が検出された。この溝の最も低い部分の標高は63.62mであり、2トレンチ拡張区で検出された溝の標高(63.64m)に非常に近い値である。位置的にも2トレンチ拡張区の溝につながる可能性が非常に高く、標高は若干異なるが3トレンチで検出された溝とも、位置的につながる可能性が高い。一方で、この溝は2トレンチ拡張区と3トレンチで検出された溝にくらべ浅い。これは、図20-3層において、樹根による擾乱が大きく見られ、そのため溝上部が削られた可能性が考えられるが、古墳の存する地点は東側がやや高いという旧地形(高知大学編2007)による影響の可能性も考えられる。

溝の北東側では標高63.6~63.7m・幅約50cmの平坦面があり、平坦面の北東端から、丘陵裾

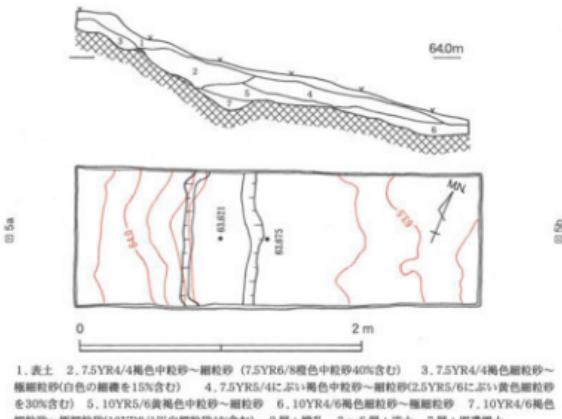


図20 5トレンチ平面図・土層断面図

へ向かって緩やかに降るように傾斜の変換が見られた。なお、このトレンチから遺物の出土は全く見られなかった。

(矢部)

**墳丘の復元** 以上のように、2トレンチ（拡張区）・3トレンチ・5トレンチで墳丘裾を画す

ると考えられる溝とその外側に平坦面が検出された。溝は検出されなかつたが、1トレンチと4トレンチで地山の傾斜変換と平坦面が検出された。溝と地山の傾斜変換点を結んでいくと円形となる。墳丘裾部と考えられる遺構の標高は約63～64mであり、この高さの等高線をみれば、円弧を描いている箇所が多く、溝と地山の傾斜変換点から復元した円に対応することから、本古墳は円墳であると考えられる。直径は約18mを計る。墳丘裾を画する溝は、墳丘の北から東側で検出されているが、1トレンチと4トレンチでは確認できなかつた。溝は少なくとも古墳の北側から東側まで回っており、墳丘西側には溝が巡っていなかつた可能性が高い。また、溝が検出されたトレン



図21 墳丘復元図

チではその外側に、溝が検出されなかったトレンチでも幅80~100cmの平坦面が検出された。おそらく平坦面が古墳周囲を巡っており、溝のない墳丘西側は平坦面によって墳丘裾が画された可能性が高い。

(清家)

### 3 石室調査区の成果

#### (1) 調査区の設定

先述の通り、墳丘中央部は戦時中の石取り作業によってコ字状に大きく攪乱を受けている。コ字状攪乱の北端には奥壁か天井石であろうと考えられる残存石材が小さめの石材の上に倒れた状態で存在している。石室の残存石材はこの2つの石材のみである。

墳丘測量調査の基準点であるC0を石室調査区の基準点とし、C0と石室調査区の北側上方にあるC1を結ぶ線を基準の主軸ラインとして調査区を設定した。南北は、C0から南側に1m、北側は露出する石室石材までを調査範囲とした。長さは約5.5mとなる。東西はコ字状攪乱の壁までとした。幅約4mである。調査を行うにあたり、C0を基準として石室調査区を区分けした。C0より南側を0区とし、C0から北側は1mごとに1区から4区まで分けた上で、それぞれの地区を主軸ラインの東西でさらに2分し、主軸ラインより西側をA区、東側をB区と呼称した。例えば、調査区の南西隅の地区は0A区となる(図22)。

石室調査区では、攪乱を受けたことによってできた崖面を精査し、盛土の堆積状況を確認している。2006年度はコ字状攪乱の南側にある東西のセクションを精査した(図22)。東側を東セクション、西側を西セクションと呼ぶ。この箇所は昨年度の報告書(高知大学編2007)でも報告をしているが、2007年度

の調査に伴い上層の解釈に変更が生じたため、再度精査を試みている。また、石室調査区の東壁を東壁区、北側を北壁区、西側を西壁区と称して、ここも精査を試みた(図22)。

第Ⅰ章で述べたとおり、当初は調査区全面の掘削とすべての壁面の精査を試みたのであるが、調査途中で予定を変更した。その結果、C0北2mラインより南側は完掘したが、北2mラインよりさらに

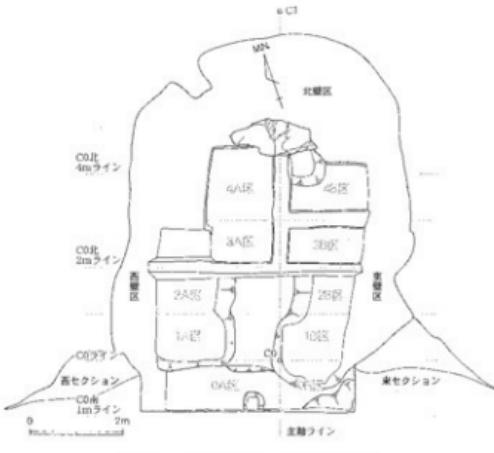


図22 石室調査区・区割り設定図

北側では、西側つまり3A区と4A区は完掘したが、東側の3B区と4B区は表土と流土第1層までの掘削にとどめた。壁面は全面の表土を除去したが、東壁区・西壁区とともに北2mラインから南側のみ精査を行い、北壁区は精査を行っていない。

(清家)

## (2) 石室部の調査

**石室調査区内の土層と遺構** 結論から言えば石室調査区は完膚無きまでの破壊を被っており、原位置を保つ石室石材が検出されなかつばかりか、石材の痕跡も検出できなかつた。石室床面も残存しておらず、盜掘坑や石材抜き取り後の堆積土を取り除くと調査区全面で地山が検出されたのである。ただ、埋葬施設の形態を推測する手がかりが全くないわけではない。以下、石室調査区の調査結果を述べつつ、可能な限り埋葬施設の復元を試みる。

石室の破壊と破壊後の土層堆積の様子をよく示しているのが、図24と図27の石室調査区の横断土層図である。図24を中心説明する。図24-①のC0北2mライン横断土層図を見ると、

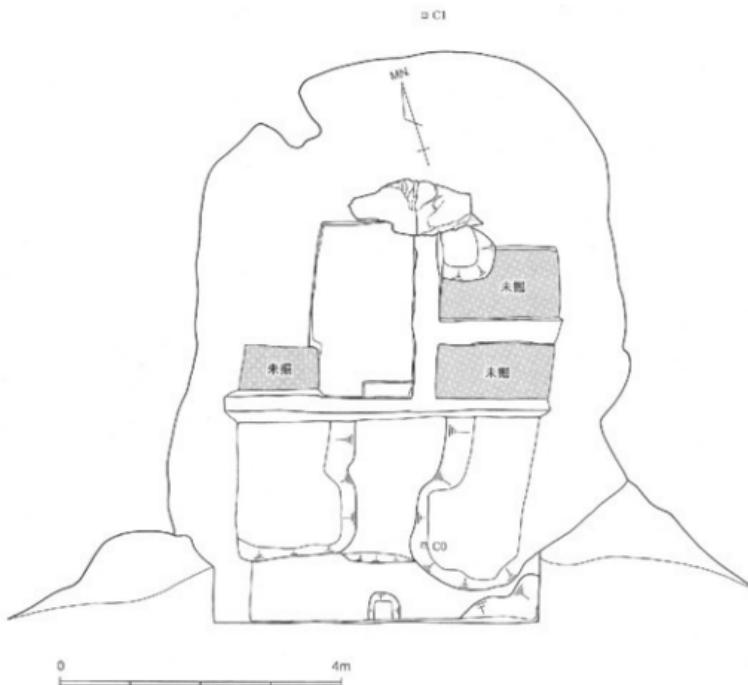
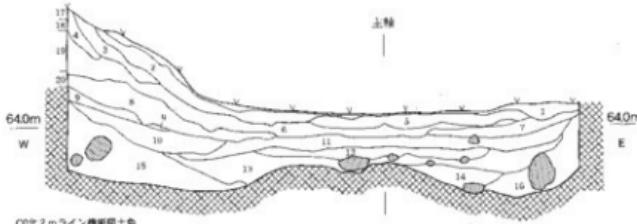


図23 石室調査区平面図

左右つまり東西から断続的に土が流入している様子が理解できる。最下層にあたる15層と16層には、石室石材と思われる一辺20cm以上の石が比較的多く含まれていた。こうした石材が含まれる土は石室の裏込め土や填丘盛土とは考えがたい。とくに15層は、填丘盛土と考えられる19層と土色や土質がよく似ており、このことから石室の石材を抜き取った際に西側盛土が崩れて流れ込み、15層が形成されたことが推測される。この横断土層図を見れば、1~14層までの土は15層か16層の上に堆積しているのであるから、石室調査区に堆積したすべての土は石材抜き

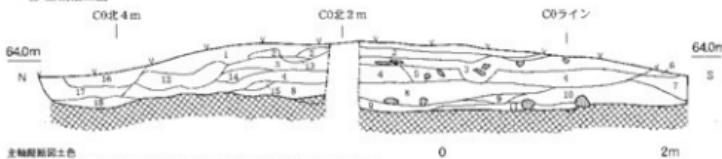
① C0北2mライン横断図



C0北2mライン横断図

1. 黄土・2. 2.10YR7/8黄褐色細粒砂(7.5YR3/1灰黑色細粒砂を30%含む) 3. 10YR8/9黄褐色細粒砂(7.5YR3/1灰黑色のシルトを30%含む) 4. 10YR8/9黄褐色細粒砂(7.5YR7/8灰褐色のシルトを10%含む) 5. 7.5YR5/4灰褐色細粒砂(10YR6/9灰黑色のシルトを15%含む) 6. 10YR5/3に近い黄色シルト(7YR1/6のシルトを10%含む) 7. 7.5YR5/4灰褐色細粒砂(10%含む) 8. 7.5YR7/8灰褐色シルト(中建5%含む) 9. 7.5YR5/2灰褐色細粒砂(10%含む) 10. 9YR6/8シルト 11. 7.5YR6/3に近いシルト(中建25%含む) 12. 10YR8/9灰褐色シルト(中建20%含む) 13. 7.5YR5/3に近い黃褐色細粒砂(10YR3/2灰白色のシルトを4%、礫を25%含む) 14. 7.5YR7/8黄褐色シルト(大礁を50%含む) 15. 10YR4/2灰褐色細粒砂(中建20%含む) 16. 10YR4/2灰褐色細粒砂(礫を25%含む) 17. 10YR8/9灰褐色土(礁石6%に相当) 18. 黄土7層に相当 19. 同20層に相当 20. 同21層に相当 21~16層: 黄土・17~20層: 黄土。

② 主軸概要図



主軸概要図

1. 黄土・2. 7.5YR5/6灰褐色細粒砂(礁石5ミリから2センチの10YR8/3灰褐色のシルト礁を7%、礁石7%N、礁石3センチの礁石を15%含む) 3. 10YR4/6灰褐色細粒砂(7YR3/1灰黑色のシルトを2%、灰土・鉛灰5%、礁石5センチの中礁を5%含む) 4. 7YR6/6灰褐色細粒砂(10YR8/2灰白と2.5YR7/6礁石の中礁を50%、礁石5センチの中礁を1%含む) 5. 7.5YR5/6灰褐色細粒砂(礁石3センチの10YR8/3灰褐色のシルト礁を6%含む) 6. 7.5YR4/4灰褐色細粒砂(礁石3センチの10YR8/3灰褐色のシルト礁を6%、礁石5%N、礁石3センチの礁石を15%含む) 7. 7.5YR3/2灰褐色細粒砂(礁石2センチの10YR8/2灰白のシルト礁を1%含む) 8. 7.5YR5/6灰褐色細粒砂(礁石3センチの10YR8/3灰褐色のシルト礁を5%、礁石4センチの中礁を3%含む) 9. 7.5YR5/6灰褐色細粒砂(礁石3センチの10YR8/3灰褐色のシルト礁を5%、礁石4センチの10YR8/3灰褐色のシルト礁を10%、礁石2センチの中礁を2%、礁石2センチの5YR4/4赤色の礁石を2%、礁石6~10センチの大礁を1%含む) 11. 10YR4/6灰褐色細粒砂(礁石5センチの礁石を1%、10YR8/2灰白のシルト礁を5%、礁石1センチの大礁を1%含む) 12. 7.5YR6/8灰褐色細粒砂(礁石2センチの10YR8/1灰白のシルト礁を5%含む) 13. 7.5YR5/6灰褐色細粒砂(礁石3センチの10YR8/1灰白のシルト礁を3%含む) 14. 7.5YR5/6灰褐色細粒砂(7YR6/6礁石の礁石礁石を40%、礁石2センチの2.5YR6/2礁石の礁石礁石を1%、7.5YR8/1礁石のシルト礁を2%含む) 15. 5YR5/6灰褐色細粒砂(礁石2.5センチの2.5YR6/2礁石の礁石礁石を1%、7.5YR8/1礁石の礁石礁石を1%含む) 16. 10YR8/9灰褐色細粒砂(礁石2.5センチの2.5YR6/2礁石の礁石礁石を1%含む) 17. 7.5YR5/6灰褐色細粒砂(礁石2センチの5YR6/1礁石のシルト礁を3%含む) 18. 7.5YR5/6灰褐色細粒砂(礁石2センチの5YR6/1礁石のシルト礁を3%含む) 19. 黄土・20層: 黄土・21層: 黄土。

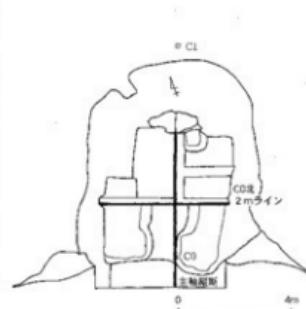


図 24 石室調査区縦断・横断土層図



図25 盗掘坑

取り後、あるいはその最中に流入した土であると推測される。図27の東西セクションと0mライン土層横断図においても同様なことがいえる。こうした流入土を取り除くと調査区全面から地山が検出された訳であるが、検出された地山は平坦ではない(図23)。0区の地山は他の地区よりもやや標高が高く、0区と1区の境界付近でやや段差を持つ。とくに注目されるのが1区と2区である。1区と2区においては中央が高く、その両サイドは約20cm低くなっていることが判明した(図23)。言い換えると調査区中央に地山の高まりが認められるのだ。0区の地山は1区よりもさらに高いので、1・2区における地山の高まりは0区まで続かない。1・2区で検出された地山の高まりは、2区で幅約1m、1区で幅約60cmを測り、1区になるとその幅が狭くなる。おおよそ羽子板の柄部のような形状を呈する。この形状は、畿内系横穴式石室の玄門から狭道部分の形状を彷彿とさせる。石室石材が抜き取られる際に、石室の平面形に沿って掘削が行われたため、こうした形状に地山が掘り残されたものと推測できる。つまり、この地山の高まりは、石室の平面形を反映していると考えられるのである。しかし、上述の通り床面は完全に削平を受けている。流入土層を掘削している際に直径5~10cm程度の円礫を少量であるが採取している。高知県内の横穴式石室は一部の例外を除くと、床面に礫を敷くことが一般的である。採取した円礫も床面に置かれた石であった可能性が高いが、調査区中央の地山の直上面からは検出できなかった。また、出土遺物も地山直上層からの出土は少なく、このことも石室床面は削平されていることを示している。

こうした地山の高まりは3A区・4A区では認められず、平坦な地山面が検出されたに過ぎなかった。なお、4A区・4B区において、残存石材下で直径約80cmの円形土坑を検出した。これは石の下に残る遺物を狙った盜掘坑であると思われる(図25・図24-②の16~17層)。掘削時期は不明であるが、残存石材の下を狙った盜掘であると考えられるので、石室石材抜き取り後の比較的新しい時期の行為と考えられる。

(清家)

**残存石材の性格** 石室調査区北端には、調査前から石室石材が2つ露出していた。小さめの石材の上に幅1.8m・奥行き80cmの石材が覆い被さるように存在していた(図版1-(2))。これまで石材の性格は不明とされ、上方の大きな石材が天井石か奥壁であろうと推測されるのみであった(廣田1979)。

4A区を掘削することによって、下方の小さな石材のほぼ全容が判明し、一辺55×80cmの長方形を呈していることが明らかとなった(図26)。また、石材の下に流土が流れ込んでいることから、原位置を保っておらず、別の場所から移動してきたものと考えられる(図26)。上方の大

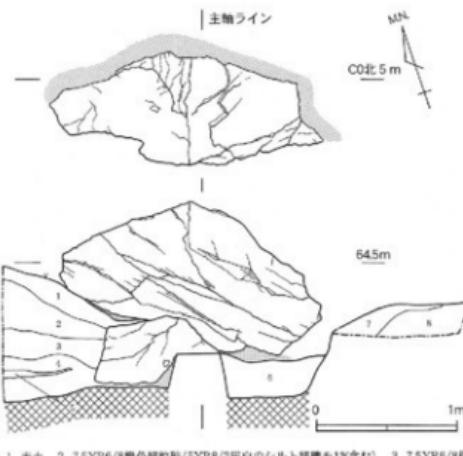
きな石材については、その全容は明らかにできなかった。しかし、その性格を考える手がかりは存在する。

石室調査区北壁区で表土を除去した折り、上方で墳丘盛土と考えられる土層を確認している。このことから現在露出している石材より奥には別の石は存在しない。石材を取り外す際には上方の石から取り外すであろう。先に玄室奥壁を取り外して天井石を落下させるとは考えがたい。だとすれば、その盛土層に近接している石材は天井石ではなく玄室奥壁部材であって、それが石室前方へ倒れ込んだ可能性が高いと考えられる。(清家)

**石室形態の復元** 先述したとおり、石室調査区内は床面まで攪乱を受けているので石室に関するすべての遺構は破壊されている。調査区壁面を観察しても墳丘盛土が確認されるので、石室墓壙の掘方や石材の裏込め土も削平されていると見るべきである。このような壊滅的な破壊を被りながらも石室の形態を復元するわずかな手がかりを得ることができた。

先に示したとおり1区と2区では調査区中央部に羽子板柄部状の地山の高まりがあり、その両脇は10~20cm程度低くなっていた。この掘方は石室石材を抜き取るための掘方であろう。この高まり部分の形状は畿内系両袖横穴式石室の羨道から玄門部の平面形によく似ている。石室石材を抜き取る際に羨道あるいは玄室側から掘削を行ったため、石材抜き取りの掘方に石室の平面形が反映されたものと推測される。そう考えるならば、1区・2区で検出された地山の高まりは、石室の羨道から玄門部の平面形を反映している可能性が高い。石材抜き取りのための掘方は玄室平面形を擴して掘削しているであろうから、実際の石室の平面形は地山の高まりよりもやや大きかったと考えられる。

3A区・4A区ではこの地山の高まりを検出することはできなかったが、玄室は調査区北端の残存石材まで続いていた可能性が高い。残存石材のうち、上部の大きな石材が奥壁であって、それが倒れてきたものと考えられたので、調査区北壁部から残存石材の厚み分手前まで続いて



1. 表土 2. 7.5YR6/8褐色細粒砂 (5YR8/2灰白のシルト混在を1%含む) 3. 7.5YR6/8褐色細粒砂 (10YR8/2灰白のシルト混在を7%、半砂を5%、半礫を1%含む) 4. 10YR8/2褐色中粒砂 (細粒砂を40%、半砂を5%、半礫を5%含む) 5. 10YR3/2黒褐色中粒砂 (細粒砂を5%、SYR4/8赤褐色の中礫を2%含む) 6. 7.5YR6/8褐色細粒砂 (10YR8/2灰白のシルト混在を5%、SYR4/8赤褐色の中礫を2%含む) 7. 10YR5/8黄褐色細粒砂 (細粒砂を2%含む) 8. 7.5YR6/8褐色細粒砂 (10YR8/2灰白のシルト混在を5%、SYR4/8赤褐色の中礫を1%含む) (アミ部は土の堆積で石材の輪郭が不明瞭な部分)

図 26 残存石室石材平面・立面図

いたことになる。

このように考えると地山の高まりにおける幅の広い部分に玄室があると見て、玄室の奥壁を先の通り考えると長さ4.3m以上に玄室長は復元できる。同様に、玄室幅は約1.3m以上と推測できる。幅の狭い部分を羨道部と考えるならば、羨道長は1.0m、羨道幅も80cm以上と推測できる。石材抜き取りの掘方は0区と1区の境界付近で終わるので、羨道は0区まで伸びていなかつた可能性が高い。羨道は長さ1mを超えていたと考えられる。

繰り返しになるが、羽子板状高まりは石室平面形のあくまでも反映にすぎないのであって、石材掘方は石室平面ラインを破壊しているであろうから、羨道長を除く上記の復元の数字は最小を見込んだ数値であって、実際の石室平面はそれよりも大きかったと考えられる。

以上のようなことから、本古墳の石室は短い羨道と細長い玄室という、土佐でよく確認されるタイプの畿内系横穴式石室と考えられるのである。  
(清家)

**遺物出土状況** 上述の通り石室調査区は床面まで搅乱を受けて削平されていたので、原位置をとどめて出土した遺物はない。出土遺物は近世陶磁器・古代～中世の土師器と須恵器・古墳時代終末期の須恵器である。遺物は0区から2区の出土が多いが、の中でも1A区と2A区からの出土が多い。3区より北で出土した遺物は少なく図29-2・8、図30-24があるに過ぎない。図29-2は、調査区北端の残存石材下で検出された竪掘坑からの出土である。古墳時代終末期の土器に限らず中世土器も比較的レベルの浅い所から出土していることは、石室調査区の土層が搅乱されていることと対応しよう。それでも注目すべき事は、子持器台片の多くが羨道跡と思われる1A区と2A区の中央から出土していることである。石取り作業の搅乱時に石室奥から羨道部へ移動した可能性もあるが、副葬時あるいは追葬時の配置場所を反映している可能性もある。  
(清家)

**壁面** 石室部分は大きくコ字状に掘削されていることは繰り返し述べているところであるが、そのために石室調査区の東・西・北の3方に崖面ができている。これを東壁区・西壁区・北壁区と呼ぶ(図22)。また石室の南側も社殿建築のために大きく削平され、東西方向の崖面が存在する。これを崖面調査区と呼ぶ。この崖面調査区は上記のコ字状掘削のために東西に分断されているので、東側を東セクション、西側を西セクションと呼ぶ(図22)。石室構築に関わる情報と古墳盛土の堆積情報を得るために、これらの崖面を精査した。

まず崖面調査区から見ていこう(図27)。崖面調査区西セクションを精査したところ、標高63.9～64.3mで岩盤が検出されている。これが地山である。地山は西に低く東側にやや高くなる。表土と地山の岩盤の間には盛土が観察されている。盛土は西セクションの東端近くで1.6m程度の厚さがある。墳丘裾部は標高63.0～64.0m付近を通ると推測されるので、崖面調査区付近の墳丘は、その多くが盛土で構成されていることになる<sup>⑩</sup>。西セクションを観察すると、岩盤の上にまた大きな単位の盛土(図27-10層)を積み、その後やや小さめのレンズ状の盛土

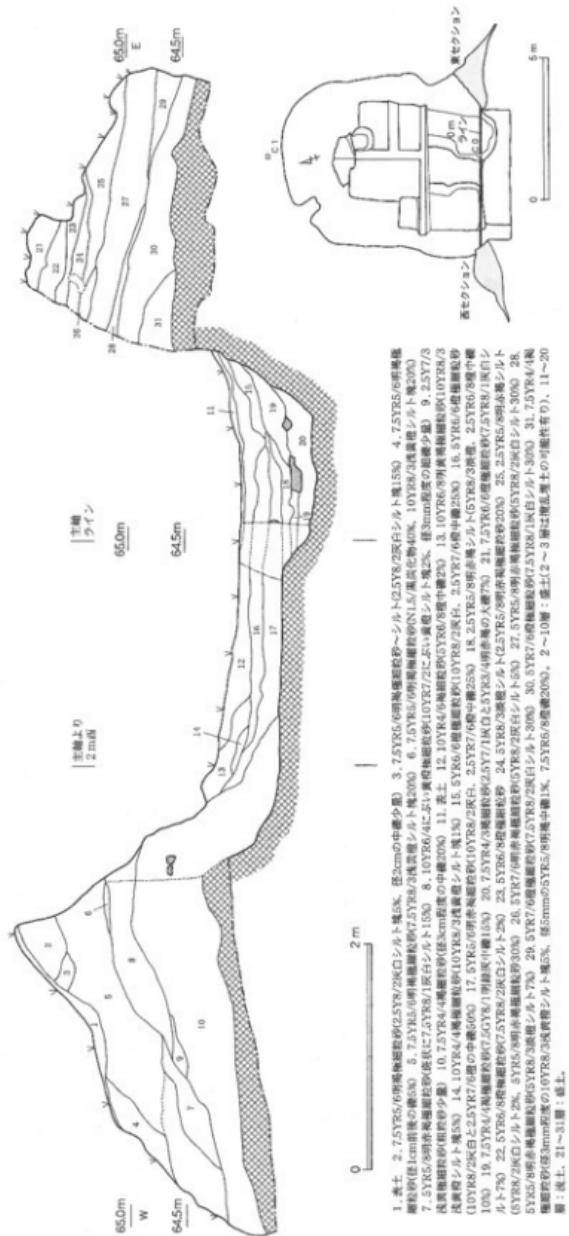


図27 東西セクション・0mライン・土層断面図

(図27-6～9層) を標高約64.7～64.9m付近まで積む。とくに7～9層を積むことで墳丘盛土を一度平坦にしようとした意図が感じられる。さらその上に大きな単位の盛土を積み(5層)、さらに小さな単位の盛土を積む(2～4層)。前回の報告(高知大学編2007)では、2・3層から5層の東端を横断して6層に統く分層線を入れており、この部分は後世の掘り込み埋土である可能性を示しつつ、その性格については西壁区の調査結果を待って判断をしたいとしていた。2007年度の調査で石室調査区西壁区を精査したところ、5層は西壁区3層(図28-②西壁区土層図)、6層は西壁区4層(図28-②西壁区土層図)に連続することが明らかとなり、これらの層は後世の掘り込み埋土ではなく古墳盛土であることが明らかとなった。ただ2層は西壁区でも立ち上がりが認められた(図28-①西壁区2層)ので、2・3層は後世の掘削跡である可能性もある。

なお、図27の10層は、石室調査区側つまり東側へ流入している様子がうかがえる。これは石室部分が石材抜き取り作業によってコ字状に掘削された後に、10層が崩れて石室調査区へ流入したのである。したがって、正確に言えば石室調査区に流入した土層と10層とは区別して分層すべきである。しかし、調査中に何度も精査を行ったが、もともと同じ層を形成した土である

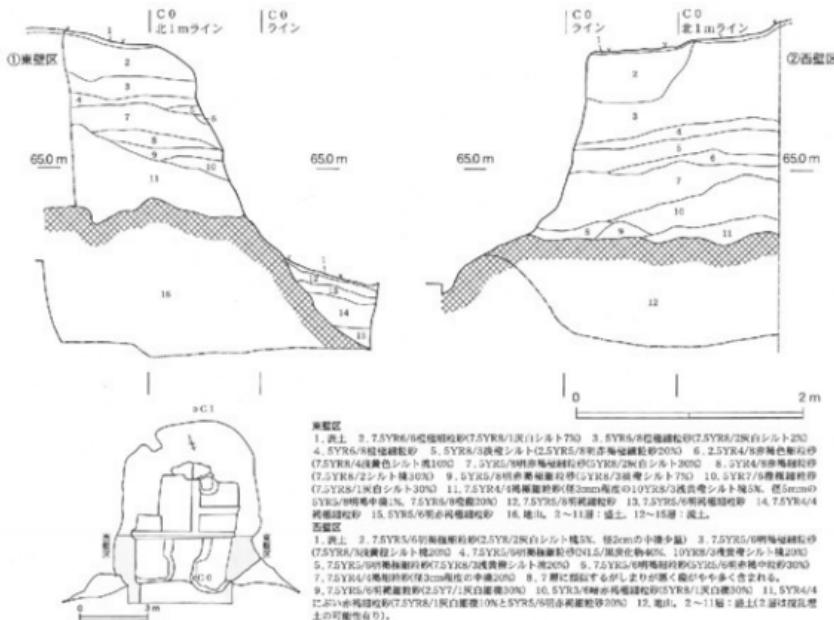


図28 東壁区・西壁区土層断面図

ので両者の区別はきわめて困難であり、10層と石室調査区へ流入した土とを区別することはかなわなかった。

崖面調査区東セクション（図27）では、標高64.40～64.65mで岩盤の地山が観察された。地山は西が高く、東へゆるやかに下降する。東側で確認された地山は西セクションよりもやや標高が高い。西セクションから東側へ向かって地山は高くなっていたのであり、削平された箇所つまり石室があった箇所が地山の最も高い地点であったのであろう。そしてその最高部から東へ緩やかに地山は降っていたのだと考えられる。地山の上に西セクションの10層に対応する30・31層という厚めの盛土をまず施している。その上は西セクションとは異なり、やや薄い盛土を幾層も傾斜面に流すように施している。いずれの盛土も固くしまりがある。東セクションと西セクションでは盛土の施し方が異なる点は興味深い。また、西セクションのように盛土を施す途中で平坦面を形成とした形跡は明瞭には見いだしがたい。その可能性があるとすれば28・29層上面がその候補となろう。

石室調査区西壁区（図28-②）では、地山である岩盤の上に大きな単位の盛り上がり北側へレベルを上げながら堆積している様子が観察される。西壁区では7層上面がやや北へレベルを上げながらも、その傾斜は緩やかになっている。その上位にある5層の傾斜も緩く、この5層は西セクションで水平を意識しているとした西セクション8層（図27）に対応する。おおよそ標高65.2m付近で墳丘盛土構築過程で一区切りを受けた可能性がある。

このことは東壁区でも観察される（図28-①）。岩盤の上に大きな盛土単位である10層と11層を積み上げる。その上に8～9層という細かい単位の盛土を積んで、水平としている。このうち9層は東セクションの28層（図27）に相当する。8層上面が65.3m前後である。すなわち標高65.2～65.3m前後で墳丘盛土をある程度水平にしようとする試みが東西で見られ、墳丘構築過程の一段階がここにあることが理解されるのである。

なお、東西セクション・東壁区・西壁区でも石室構築に関わる掘方や埋土は認められず、石材抜き取り作業や社殿建築にかかる削平により、石室部分の構築に関わる情報は大きく失われたと考えられる。

（清家）

#### 注

- (1) ただし、2トレンチ南端では標高64.6mで地山を確認しているので、古墳全体が盛土で築造されているわけではないようだ。崖面調査区はむしろ石室の前面、つまりは古墳の前面に位置しているので、この部分は盛土が多く使用されたと言うことである。

#### 参考文献

- 人文学部考古学研究室、高知  
高知大学考古学研究室編 2007『大元神社古墳発掘調査報告書』高知大学考古学調査研究報告第4冊 高知大学  
人文学部考古学研究室、高知  
廣田典夫 1979「考古篇」『土佐山田町史』土佐山田町教育委員会、高知：pp. 37-154

## 第III章 出土遺物

### 1 出土遺物の種類

出土遺物はすべて石室調査区から出土した。遺物は、大元神社古墳の埋葬に伴うと考えられる須恵器以外に、古代から近世の土器・陶磁器も出土している。  
(清家)

### 2 古墳時代の遺物

古墳時代に属する遺物は須恵器のみである。これ以外に鉄器・玉類などは出土していない。須恵器には蓋杯・高杯・器台・甕・壺と子持器台の破片が出土している。甕や壺と思われる資料は少なく、図示し得るものはなかった。

(清家)

**杯蓋** (図29-1~5) 1は復元口径11.4cm、残存高3.3cmである。天井部は平坦に近く、緩やかな丸みをおびて下降する。天井部と口縁部の境は緩い稜をなす。口縁端部は丸くおさめる。外面の広い範囲に、自然釉と窯体のものと思われる砂粒が多く付着しており、調整は見えにくく、明瞭でない。

2は復元口径11.2cm、残存高3.5cmである。天井部から口縁部にかけて緩やかに下降し、天井部と口縁部の境には弱い稜線が認められる。回転ヘラケズリは反時計回りに天井部外面の約2分の1に施される。口縁端部は丸くおさめる。また、胎土に長石を少量含む。

3は復元口径11.0cm、残存高3.6cmである。天井部の中央付近にわずかに高まりが見られ、つまみが付いていたと思われるが、欠損している。天井部は丸みをおび、反時計回りの回転ヘラケズリが施される。天井部と口縁部の境は稜をなす。口縁端部は丸くおさめる。外面の広い範囲に自然釉が付着する。

4は復元口径11.2cm、残存高2.0cmである。天井部は大部分が欠損するが、わずかにカーブして下降し、口縁部との境は緩やかな稜をなす。口縁端部は

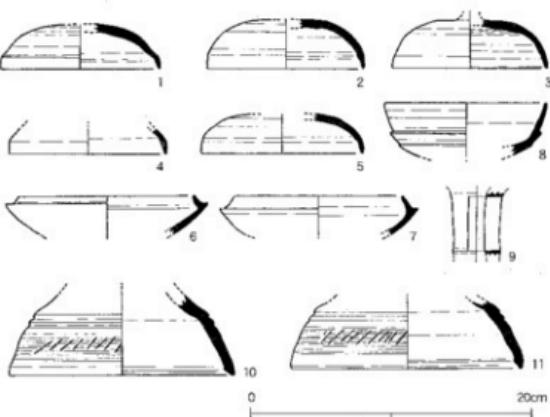


図29 須恵器実測図

丸くおさめる。外面に自然釉の付着が少々見られる。

5は復元口径11.6cm、残存高2.8cmである。天井頂部は平坦に近く、口縁部に向かって緩やかに下降する。天井部と口縁部の境界は弱い稜をなす。回転ヘラケズリは天井部外面の約3分の1に施される。天井部の大部分が欠損しているため、回転の方向は不明である。口縁端部は丸くおさめる。  
(渡邊)

**杯身** (図29-6・7) 6は復元口径12.6cm、残存高2.7cmである。立ち上がりは0.6cmと低く、内傾する。口縁端部は丸くおさめる。底部は緩やかにカーブして下降するが欠損部分が多く、調整や器高は不明である。

7は復元口径12.0cm、残存高2.7cmである。立ち上がりは0.9cmで内傾する。口縁端部は細く尖る。受け部から底部にかけて緩やかなカーブを描くが、底部は欠損部分が多く詳細は不明である。  
(渡邊)

**無蓋高杯** (図29-8) 杯部のみで脚部は欠損する。杯部の復元口径11.5cm、残存高3.8cmである。口縁端部は丸くおさめる。杯の体部に2段の稜があげられ、下段がより鋭い。  
(渡邊)

**高杯脚部** (図29-9) 破片の上部には杯部の貼り付け痕が認められる。破片の下部には浅く鈍い凹線が認められ、さらにもう一段下に続くと見られるため、長脚二段透かし高杯の脚部上段部分であると考えられる。脚部上段には長方形の二方向の透かしがあったと思われる。残存部の復元径は最大3.7cmである。また、内面に捩り痕が見られる。  
(渡邊)

**脚部** (図29-10・11) 台付壺の脚部と考えられる。10は復元底径16.0cm、残存高5.7cmである。裾部はわずかに外湾するカーブを描き、内傾して立ち上がる。裾部にはカキメと櫛描き列点文が施され、その上方には2本の凹線を巡らせる。凹線によってつくり出された稜は丸みをおびる。凹線を境に上部は内湾して立ち上がる。

11は復元底径16.6cm、残存高4.7cmである。裾部は10と同様に緩やかに内傾して立ち上がる。裾部にはカキメと櫛描き列点文が施され、その上方に2本の凹線があげられる。凹線によってつくり出された稜は鈍い。

以上の須恵器の時期に関しては、杯蓋の小さな口径などに田辺昭三による須恵器編年 (田辺1966) のTK217型式の要素が見られるが、杯身の口径、長脚二段透かし高杯が存在する点などから、TK209型式の範囲に属するものと考えられる。  
(渡邊)

**子持器台** (図30~32) 子持器台と考えられる須恵器片が多数出土している。資料の多くは石室調査区1A区・2A区ならびにC0からC0北2mまでの縦断壁中から出土している。24は3A区から出土している数少ない資料である。層位的には、地山直上で検出された資料は少なく、石室縦断土層図の3~8層 (図24) からの出土が目立つ。このことは土層が擾乱されたとという観察結果と対応する。

子持器台の蓋は6個体出土している (12~17)。いずれも天井部に2条の沈線を巡らし、天井

頂部を残す個体はいずれも乳頭様のツマミを持つ。ツマミが残る個体は13・14だけであるが、16はツマミの剥離痕が認められる。他は天井部を失っているので不明な点は残るもの、いずれもツマミを持っていた可能性は高い。このほかに、砂粒の少ない緻密な胎土を用いる点や良好な焼成で色調も似るなど、いずれの個体も類似点は多い。

大きさから大小2種に分かれる。大きなタイプは12・13で直径10.4cmを測る。このうち13は、

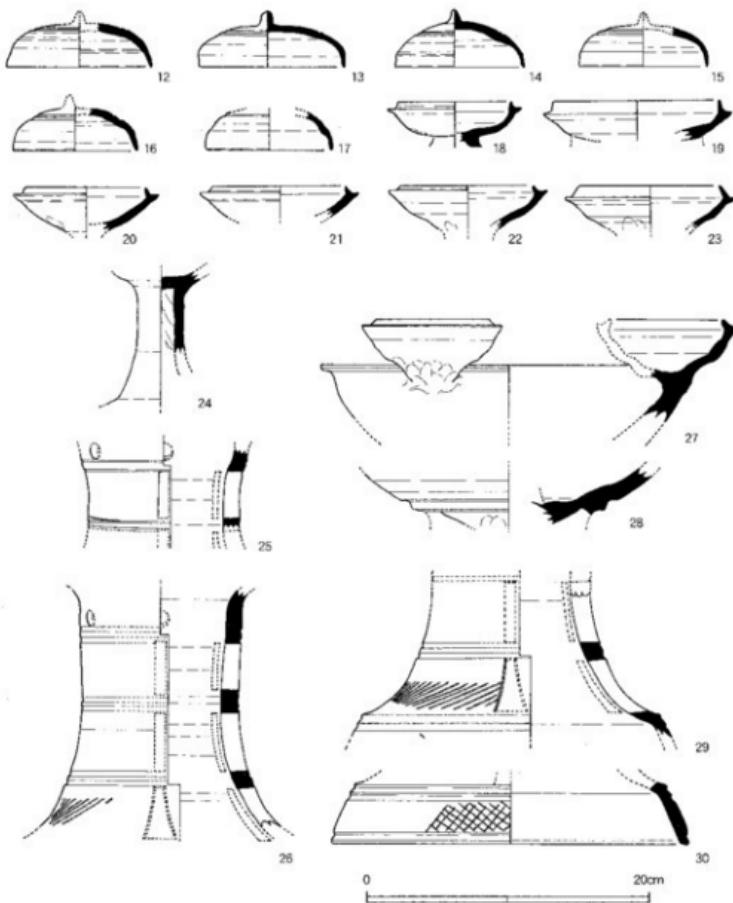


図30 子持器台実測図

天井頂部まで遺存し、頂部に直径1.0cm・高さ1.0cmの乳頭様のツマミを持つ。13の器高は4.0cmを測る。両個体とも天井部はやや平らで、幅約2mmの沈線を4mmの間隔をあけて2条巡らしている。天井部から口縁部へはなだらかにカーブするが、天井部から口縁部の境界付近でカーブがやや強くなっている。端面は丸くおさめる。内外面ともに丁寧にナデで調整される。

口径の小さなタイプは14~17で、直径9.0~9.2cmを測り、高さが判明する14は器高4.2cmである。14の天井部は水平というよりもやや丸く、直径1.0cm・高さ1.0cmの乳頭様のツマミが天井頂部に付く。天井部に幅約2mmの沈線を約2mmの間隔をあけて2条巡らす。天井部から口縁部へ緩やかにカーブして続くが、天井部と口縁部の間に弱い稜線が認められる。15の天井は水平に近い。天井頂部を欠くが、他の蓋と同じように乳頭様のツマミを持っていたと推測される。天井部に幅約2mmの沈線を約4mmの間隔をあけて2条巡らしている。天井部から口縁部へは緩やかにカーブするが、天井部と口縁部の境界でやや強く屈曲し、口縁部は口縁端部まで真っ直ぐに降りる。口縁端部は丸くおさめる。16の天井部は水平というよりもやや丸い。天井頂部には、直径1.0cmのツマミ剥離痕が認められる。天井部に幅約2mmの沈線を約4mmの間隔をあけて2条巡らす。天井部から口縁端部まで緩やかにカーブして続く。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに丁寧にナデで調整されている。

子持器台の杯身と考えられる個体は7個（18~23・27）ある。このうち27は器台鉢部口縁に連接している。杯部のサイズからは3種に分けることができる。最も大きい個体は19で、直径11.8cmを測る。底部に剥離痕があるので子持器台の杯部と考えられる。口縁部はやや内傾し端部は丸くおさめる。この個体は口径が他に比べ大きく、これに対応する蓋は出土していない。

次に口径が大きいタイプとして口径9.6~10.0cmのものがある（21~23）。口径の大きい杯蓋とセットになるものと思われる。21は、底部を欠いたため子持器台杯部であるとの確証はないが、他の個体と胎土や焼成がよく似ていることや一般の杯身にくらべると小形であるので子持器台杯部と判断した。小破片であるため他の個体と同一の可能性もある。口径9.6cm、立ち上がりは0.7cmと低いものの器厚は薄くシャープな作りである。立ち上がりはやや外反し、端部は丸くおさめる。22の立ち上がりはやや外反し、端部は丸くおさめる。立ち上がりは0.7cmと低いものの器厚は薄くシャープな作りである。内外面ともにナデで丁寧に調整される。底部には指頭圧痕が認められ、これは器台鉢部の口縁部に接合するための痕跡であると思われる。23は口径10.0cm、立ち上がりは1.0cm、器厚は薄くシャープな作りである。立ち上がりはやや内傾し、端部は丸くおさめる。

最も小さいタイプは口径8.0cmで、18・20・27がある。口径の小さな蓋と組み合うものと思われる。18・20は立ち上がりは0.6cmと低く、体部からの立ち上がりが「く」字状を呈し、端部はやや外反しつつ丸くおさめる。器厚は薄くシャープな作りである。両者は口径の約3分の

1程度を残す破片で、別個体として図化したが同一個体の可能性もある。27は、器台鉢部口縁に杯部が取り付いた個体である。器台鉢部口縁はこの資料以外に出土していないので、器台鉢部の形状ならびに杯身と鉢部の接合状態を知る唯一の資料である。杯部口径は8.0cmを測る。立ち上がりも0.7cmと低く、体部から内傾するように立ち上がり、端部は丸くおさめる。体部は内外面ともに丁寧なナデが施される。器台鉢部の口径は26.6cmである。体部は上方へゆるやかに外湾し、口縁部は外反し端部は丸くおさめる。内外面ともに丁寧なナデが施される。杯部と鉢部口縁の接合状況を観察すると、鉢部と杯部をそれぞれ完成させた後で両者を接着したようである。鉢部口縁と杯身底部に粘土を付加し、付加した粘土を両者になでつけ、指で押さえることで杯部と鉢部を接着させている。

24は高杯の脚部であるが、透穴が存在せず、脚部の下端部内面に剥離痕が観察されたこと、色調・胎土ともに他の子持器台の破片と類似することから、子持器台鉢部の中央に設置された高杯の脚部と判断した。杯部は失われており、その形状は不明である。脚部長8.5cmを測る。外面は丁寧にナデが施される。内面には粘土の絞り痕が認められる。

28は器台鉢部の底部破片である。底部外面は器台脚部が剥離し、脚部との接合面が見え、指頭圧痕が観察できる。脚部接合面から緩やかに外湾して上方へ伸びる様子がうかがえる。内面中央には剥離痕跡が認められる。24の脚部は直接接合はできなかつたが、ここに設置されたのであろう。

25～30は器台脚部の破片である。30は脚部の下端である。下底面より0.4cm・3.4cm・4.1cmのところに幅3～4mmの回線を巡らす。下から1条目と2条目の回線間に、櫛状の道具で5mm角の斜格子文を施す。下から3条目の回線のすぐ上には、透穴の底辺が認められる。29は2段分が遺存している。29の最下部と中央部に2条の回線がそれぞれ認められる。下部の回線の下には、櫛状工具で付けられた斜線がわずかに確認できるので、この部分は30の上部に相当するものであろう。29は30と直接接合はしなかつたが、30に連続する部分のバーツであろう。2組の回線の間には櫛排列点文が施され、側辺がやや内湾する台形状の透穴が施される。透穴は3方向に空けられていたと推測される。上方の回線の上の段には長方形透穴がやはり3方向に空けられていた。この段には文様は施されていない。26は4段分が遺存している。各段はそれぞれ幅3～4mmの2条の回線で区画される。下2段分は上方へややすぼまりながら続き、下から3段目と4段目はやや外に開いて、最上端部は外反する。26の最上端部を観察すると剥離痕が認められるので、この部分は器台鉢部下底面に接合するものと思われる。最下段と2段目は29に対応する箇所であろう。文様・調整とも29と同じである。下から3段目には2段目と同様の長方透穴が空けられ、4段目には直径1.3cmの円形透穴が空けられる。各段の透穴は3方向である。1段目から3段目までの透穴は上下に軸を揃えているが、4段目の円形透穴は約60度ずらして施されている。ただ、4段目において、1～3段目の透穴の直上にあたる箇所で、いった



図31 透穴を塞いだ痕跡

ん円形の透穴が空けられた後、粘土で埋め直されている痕跡が認められている（図31）。須恵器工人が円形透穴を誤った位置に空けたのであろうか。25は26の下から2～4段目に相当するバーツである。3段目と4段目を区画する凹線が細くなっている上に、凹線に乱れが生じている。

（清家）

**子持器台の復元** 上記の子持器片台から全体像を復元することにしよう（図32）。脚部である

25・26・29・30は接合ができなかつたが、それぞれの関係が判明しているので脚部はおおよそその復元が可能である。最も大きなバーツである26は最上端部が鉢部底面に連続することが分かっている。また26は29を介して30の底部ともつなげることができる。その結果、脚部は底部を含めて5段で構成される事が判明する。各段は2条の凹線で区画される。最下段である底部には横状工具で描かれた斜格子文が施される。下から2段目は側邊がやや内湾する台形状の透穴が3方向に空けられ、その周囲には櫛描列点文が施される。3・4段目には幅8～9mmの長方形透穴がやはり3方向に空けられる。最上段はやや幅が狭く、円形透穴が下の段の透穴と約

60度ずれて施されている。

器台鉢部の形状は27と28の関係が不明であるので厳密には不明であるが、27の口径と27・28の傾きから考えると、鉢部は口径に比べ浅い形状が復元される。

器台鉢部に杯身が連接した資料は27の個体だけであったので、器台部にいくつの杯身が配置されていたかは正確には不明である。器台鉢部の口縁径は26.6cmであり、27からは杯身と杯身の間隔が25mm以上であることがわかっている。この間隔で鉢部の周囲に直径8.0～10.0cmの杯身を配置するとすれば7個が限界である。中央部に高杯を置くとし



図32 子持器台復元図

て杯身あるいは杯蓋は最大計8個必要である。図30に示したように杯身は7個体、杯蓋は6個体図化できた。ただ、杯身の破片は残りが悪く、同一個体の可能性がある資料を除くと少なくとも5個体出土していることになる。杯蓋が6個体確認されたので、中央部高杯の蓋を差し引くと、子持器台には少なくとも5個以上の杯身が配されたことになる<sup>(1)</sup>。器台鉢部口縁に配される杯身の最大数は7個であるので、器台鉢部口縁には5~7個の杯身が配置され、中央部に高杯を持つという形態が復元される。復元図では6個の杯身が鉢部口縁に配置されていると想定して作成した。また、中央の高杯がどのような形状の杯部を持っていたかは明らかでない。復元にあたっては、高杯杯部が、器台鉢部口縁の杯身と同様なものであったと想定した。高杯脚部は器台鉢部の深さよりも長いので、中央の高杯杯部は周囲の杯部より1段高い位置にあることになる。

以上のような過程を経て図32のように復元した。底部径24.5cm・脚部高22.5cm・器高34.9cm・器台鉢部径26.6cm・器台鉢部高7.0cmに復元できよう。

杯身の立ち上がりが低く、杯蓋は乳頭形のツマミを持つ。こうした乳頭形のツマミと宝珠ツマミとの関係が問えるとすれば、TK217古相に位置づけられよう。  
(清家)

### 3 古代以降の遺物とその意義

**古代以降の遺物** (図33・34)　すべて石室調査区の包含層から出土している。まず、古代末から中世の遺物について述べる (図33)。31は円盤状高台を有する須恵器小椀である。回転台成形であり、底部には回転糸切り痕が残る。法量は、器高が3.5cm・口径が7.8cm・高台の高さが0.5cm・高台径が4.0cmである。円盤状高台の椀を縮小したような形態をもつ、ミニチュア製品である。高台は断面が台形で側面にナデ調整を施しており、底部内面には凹みがある。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反し端部を丸くおさめる。内外面ともにナデ調整である。椀の形態から年代をあてはめると10世紀後半を中心とする時期に位置づけることができる。しかしミニチュア製品であるため、通常の椀の編年を当てはめてよいかどうか問題を残す。

32~36は土師質土器である。32は輪高台を有する椀であり、色調は淡黄色を呈する。高台は高さが0.2cm・高台径が5.6cmであり、高台のつくりはしっかりといるもの的小型化し

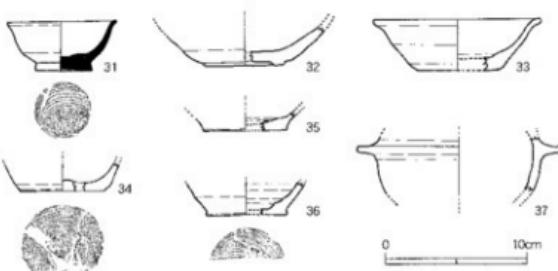


図33 古代～中世土器実測図

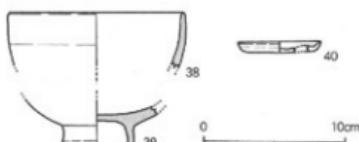


図34 近世土器実測図

委員会1992)、33も同じような土器だとすると高台は付いていない可能性が高い。内外面は回転ナデ調整が施されている。12世紀後半から13世紀初頭のものである。

34は、復元できた部分が底部のみであるため器種は特定できないが、杯もしくは椀と思われる。底部に回転糸切り痕が残る。色調は灰色を呈し、底部径は6.0cmである。33と同時期のものと考えられる。35・36は内面に粘土紐の単位を明瞭に残す椀で、底部から外上方に直線的に立ち上がる形態である。底部に回転糸切り痕が残る。色調は、35は浅黄色、36は橙色を呈する。また調整については、35は表面が磨耗しているが、36は内外面ともにナデ調整が施されていることがわかる。どちらも底部径は約5.7cmである。14~15世紀のものと思われる。37は瓦質の羽釜である。オリーブ黒色を呈し、鍔の径が14.5cmと小型である。体部は丸く、体部に対して垂直に鍔がつく。また、鍔の端部は面をなしている。搬入品であり、13世紀後半から14世紀のものと考えられる。

以上のように、古代末から中世の遺物は、10世紀後半の31をはじめとして、15世紀のものまで断続的に存在する。ただし、前述したとおり31の時期については確定的なことはいえない。

次に、近世の遺物について述べる(図34)。38・39は灰釉陶磁の椀である。どちらもオリーブ黄色を呈しよく似ているため、同一個体の可能性が高い。38は口径が12.6cmであり、口縁部は直立し端部を丸くおさめる。39は輪高台をもち、その下端は内側にやや湾曲する。高台の高さは1.4cm・高台径が4.7cmである。18~19世紀の肥前陶磁である。

40は土師質の小皿である。色調はぶい褐色を呈し、口径が5.9cm・器高は0.7cmである。回転台成形であり、底部に糸切り痕を残す。内外面ともにナデ調整である。中世末、もしくは近世でも古い時期のものと思われる<sup>(3)</sup>。

(岡本)

**古代～近世土器の意義** 以上のように石室調査区から、古代から近世の土器・陶磁器も出土した。この中にはミニチュアと推測される土器も含まれており、古墳が古墳人の埋葬・葬送の場として機能しなくなった後、祭祀場所として新たに機能した可能性を示している。これは、大元神社がこの地に勧請されるに至った経緯と神社の起源を考える上で重要であろう。江戸時代の書物である『南路志』(高知県立図書館1990)によれば、大元神社社殿には長宗我部盛親の棟札があったという。また『高知縣神社誌』(竹崎1931)によれば「慶長五庚子歲二月國守盛近再

ており、31と同程度の時期のものと思われる。33も椀で、色調は明黄褐色を呈し、器高は3.6cm、口径は12.0cmである。粘土紐巻上げ成形であり、体部は丸みを帯び、口縁部は外反し端部を丸くおさめる。底部は復元できなかつたが、香美市土佐山田町・高柳遺跡SK 1の39の土器と形態が似ておる(土佐山田町教育

興」の棟札があったとされる。16世紀末に「再興」されたのであれば、神社の起源はそれ以前に遡りうる<sup>(1)</sup>。

中世末以降の土器は「再興」後の神社と直接関わる土器と考えられるが、それ以前の土器がどのような目的に使用されたかは情報が不足して明らかでない。「再興」前の神社に関するものか、それとも神社建設前のこの地が、古代から中世にかけて神聖な場所として認識され、祭祀対象であったのかもしれない。こうした神聖性が当地に神社が勅請された要因となったことも考えられよう。いずれにしてもこれらの土器は、古墳の再利用と大元神社の起源を考えるのに重要な資料である。さらに、大元神社に限らず、古墳に近接して神社が建設されることが土佐では多いので、土佐における古墳と神社の関係を普遍的に分析するための良好な資料だとも言える。

(清家)

#### 注

- (1) ただ、図30-19の個体は問題を有している。この個体は唯一直径が11.0cmをこえて大きく、他の器台杯身や杯蓋と釣り合わない。器台中央部の高杯の杯身とも考えられない。19と高杯脚部24と色調が大きく異なり、19の底部に認められる剥離痕と24とが対応しそうにないからである。とすれば、19は別の器台に附属する可能性もある。その場合、子持器台が2個体以上この古墳に副葬されていたことになり、今回復元した子持器台鉢部口縁に付属の杯身数は7個以下としか言えなくなる。しかし、子持器台脚部と考えられるバーツが他にないことから、この考えは却下されよう。現時点では一つの子持器台にやや不揃いの杯部が配されていたと考えておきたい。
- (2) 古代から近世の土器については、松田直則氏・池澤俊幸氏・浜田恵子氏・吉成承三氏よりご教示を得た。
- (3) 文献探索には伊藤嘉高氏のご協力を得た。

#### 参考文献

- 高知県立図書館編 1990『南路志』第2巻 高知県立図書館、高知  
 竹崎五郎 1931『高知縣神社誌』高知県神職会、高知  
 田辺昭一 1966『南邑古窯址群』I 平安学園創立九十周年記念研究論集第10号 平安学園教育研究会、京都  
 土佐山田町教育委員会 1992『高柳遺跡・高柳土居城跡発掘調査報告書—明治地区開墾整備工事関連遺跡発掘調査一』、高知



## 第IV章 考察：土佐山田における古墳築造と大元神社古墳

### はじめに

高知大学考古学研究室では3年にわたり大元神社古墳を調査し、その内容を明らかにしてきた。ここでは、まず大元神社古墳を高知平野の古墳の中に位置づける。次に、大元神社古墳の位置づけと大きく関わる、物部川西岸にある土佐山田地域の首長墳の動向について考察を行いたい。

#### 1 土佐後・終末期古墳における大元神社古墳の位置

大元神社古墳はTK209型式期に築造された直径18mの円墳であることが判明した。埋葬施設は大きく破壊されていたが、調査の結果、玄室長4.3m以上・玄室幅1.3m以上・羨道長は1.0m程度・羨道幅80cm以上の規模を有する畿内系横穴式石室であろうと推測された。壊滅的な破壊のため副葬品は須恵器以外に出土していないが、子持器台が出土したことは注目される。筆者は、先学に学びながらこれまでに土佐の後・終末期古墳についておおよその傾向を示したことがある(清家2006・清家2007)。今回の調査で判明した大元神社古墳の諸要素を土佐の古墳の中には位置づけてみよう。

**石室規模** 土佐の古墳の中でもっとも情報が多い石室について見てみることにしよう。前稿では、石室の玄室面積から特大型(14m<sup>2</sup>以上)・大型(10m<sup>2</sup>以上14m<sup>2</sup>未満)・標準型(4m<sup>2</sup>以上10m<sup>2</sup>未満)・小型(4m<sup>2</sup>未満)の4分類ができる事を示した(清家2006・清家2007)。石室規模は古墳の階層差をシャープに反映するので、それぞれの石室規模に応じて特大型古墳・大型古墳・標準型古墳・小型古墳と呼び変えることが可能である。特大型・大型古墳は岡豊を除いて高知平野に散在し、大型は河川や丘陵で区画される領域を統括する地域首長墓であり、特大型はそうした首長をとりまとめ高知平野を代表する盟主的古墳であるとの見解を示したのであつた。

大元神社古墳はどのような位置にあるのであろうか。大元神社古墳の石室は、玄室長4.3m以上・玄室幅1.3m以上であり、玄室面積は5.6m<sup>2</sup>以上との結果となっている。石室破壊の痕跡という間接的な情報で、左記の数字は最小の見積もりであり、大型に属する可能性は皆無ではないが、標準型の横穴式石室である可能性が高い。羨道は短く、玄室長は幅の2倍以上という細長いタイプの玄室であることは、土佐では比較的多く見られるタイプである。

この標準型石室を持つ古墳は土佐山田にも多く、小倉山古墳(玄室面積8.8m<sup>2</sup>、以下同じ)・須江ツカアナ古墳(8.6m<sup>2</sup>)・西久保古墳(7.8m<sup>2</sup>)・前行山1号墳(7.0m<sup>2</sup>)・上方古墳(6.7m<sup>2</sup>)・椎山1号墳(6.1m<sup>2</sup>)などがあり(表1、図35)、大元神社古墳の石室規模は突出したものとは

いえない。

**墳丘** 土佐の後・終末期古墳で墳丘調査が行われた古墳は少なく、墳丘測量図すら作成されていない古墳も多いため、各古墳の墳丘規模には不確定要素が多い。しかし、およその傾向はつかむことができる（清家2007）。墳丘規模が20mを超える古墳は伏原大塚古墳と小蓮古墳で、ともに特大型石室を持つと考えられる。墳丘規模が15mを超える古墳には、特大型あるいは大型石室が設けられている一方、そうした古墳には標準型や小型石室がなく、墳丘規模でも一定の階層差が認められた。しかし、大型石室の中には直径10m程度の墳丘も存在するため、大型石室とそれ以下の古墳では、墳丘規模において明確な差を見いだしにくいところもある（清家2007）。

表1 土佐山田の主な古墳と石室

	古墳名	位置	玄室面積(m <sup>2</sup> )	出土遺物
1	伏原大塚古墳	香美市土佐山田町百石町	14.0	子持器台1・子持広口壺1
2	小倉山古墳	香美市土佐山田町植目字小倉山	8.8	
3	鏡野学園前古墳	香美市土佐山田町植目字伏原山	8.0	
4	雪ヶ峯1号墳	香美市土佐山田町植目字雪ヶ峯	4.6	杯身・直口壺・壺
5	大元神社古墳	香美市土佐山田町植目字青サレ山	5.6以上	子持器台1・高坏ほか
6	前行山1号墳	香美市土佐山田町植目前行	7.0	台付直口壺・台付瓶
7	桜ヶ谷1号墳	香美市土佐山田町植目桜ヶ谷	?	子持壺1
8	須江ツカアナ古墳	香美市土佐山田町須江字五反田	8.6	須恵器・鉄鏃・馬具・耳環・刀子
9	新改横走古墳	香美市土佐山田町新改横走	12.5	須恵器・馬具・鐵鏃・刀子・耳環ほか
10	西ノ内2号墳	香美市土佐山田町新改横走	7.6	須恵器・刀子・鐵鏃・石突他
11	西ノ内1号墳	香美市土佐山田町新改横走	4.3	
12	椎山古墳	香美市土佐山田町新改横走	6.1	須恵器・馬具・鐵鏃・玉類・耳環
13	上改田古墳	香美市土佐山田町上改田	9.7	杯身・台付直口壺
14	西久保古墳	香美市土佐山田町久次字西久保	7.8	
15	上方古墳	香美市土佐山田町伏原	6.7	

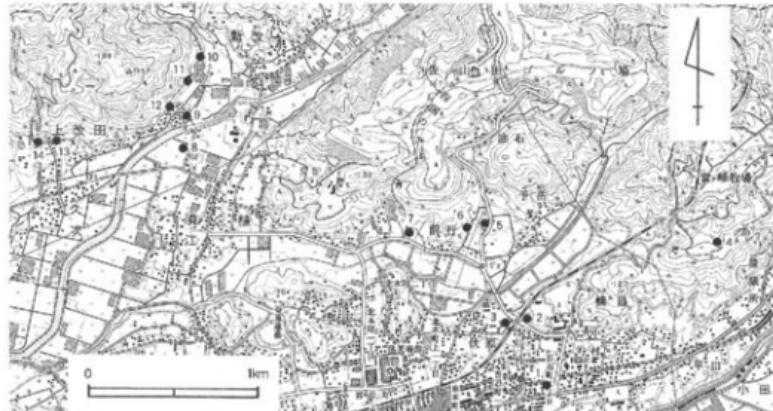


図35 土佐山田における主な古墳（番号は表1に対応）

大元神社古墳は直径18mの

円墳であった。この規模は他地域ではさして大きなものではないが、土佐では侮られるべき存在ではない。15m以上の古墳は大型石室・特大型石室を有するという傾向が土佐では認められるからである。

しかし、大元神社古墳の石室は標準型である可能性が高い。墳丘規模に比して石室規模が

小さいのである（図36）。墳丘調査が行われた古墳が少ないという不安材料はあるが、これが大元神社古墳の特徴の一つともいえよう。

**装飾須恵器** 装飾須恵器の出土は土佐では11例目であり、子持器台に限れば5例目である（表2）。これまでに伏原大塚古墳・舟岩2号墳・舟岩8号墳・久礼田高松古墳・明見彦山3号墳・桜ヶ谷1号墳・大木戸古墳群から装飾須恵器の出土例が知られている。このうち桜ヶ谷1号墳や愛宕山古墳<sup>(2)</sup>は古墳の内容が不明であり、大木戸古墳群例はいずれの古墳から出土したのかが判明しない。この3古墳は分析から除外して考察を行うことにしよう。

伏原大塚古墳の石室は特大型石室の可能性があり、墳丘も土佐最大規模である。子持器台と子持広口壺が出土している。舟岩2号墳は大型石室を持つ古墳である。子持器台と子持壺が出土している。舟岩8号墳も大型石室であり子持器台片が出土したとされるが、小破片ゆえにその形状は明らかでない。久礼田高松古墳は標準型石室であり、子持器台が出土している。大元神社古墳も標準型石室であろうと推測された。明見彦山3号墳は、玄室長2.8m・玄室幅2.1m<sup>(3)</sup>という正方形に近い玄室平面形を呈する。小形の石材が前後左右から持ち送りが見られ、高知では珍しい肥後型の系譜を引くとみられる石室墳である。子持壺が1個出土している。

表2 土佐の装飾須恵器

古 墓 名	位 置	石 室 分 類	装飾須恵器の内 容	備 考
伏原大塚古墳	香美市土佐山田町	特大型？	子持器台1・子持広口壺1	
舟岩2号墳	南国市阿曽町	大型	子持器台1・子持壺1	
舟岩8号墳	南国市同上	大型	子持器台？	小破片
久礼田高松古墳	南国市久礼田	標準型	子持器台1	
大元神社古墳	香美市土佐山田町	標準型？	子持器台1	
明見彦山3号墳	南国市明見	標準型	子持壺1	
愛宕山古墳	高知市愛宕山	？	子持壺1	
桜ヶ谷1号墳	香美市土佐山田町	？	子持壺1	
大木戸古墳群	安芸市東島大木戸	？	子持壺1	

装飾須恵器は首長墳の葬送儀器として当初創出されたものの、前方後円墳に代表される大型古墳消滅後は小規模な古墳や横穴墓からも出土し、使用層が拡大するという（岸本1975・山田1998）。大元神社古墳の子持器台はTK217型式古相まで下る可能性があるので、岸本や山田のいうように首長墳以外の古墳にも装飾須恵器が普及している時期のものであろう。したがって、子持器台の副葬から大元神社古墳を首長墳であると直ちに評価することはできない。

ただ、装飾須恵器の副葬数は土佐において古墳の階層的位置づけを理解する上で重要な要素となりうる（表2）。伏原大塚古墳と舟岩2号墳は2種類の装飾須恵器をもち、前者は特大型石室を持つ盟主的古墳で、後者も大型石室墳であるので地域首長墳あるいはそれに準じる古墳であると評価される。副葬される装飾須恵器が1個体である久礼田高松古墳・大元神社古墳・明見彦山3号墳は標準型石室に属す。資料数が少ないので明確ではないが、複数の装飾須恵器が副葬されるのは大型石室墳以上に限られている<sup>(3)</sup>。のことから考えても大元神社古墳は地域首長墳であるという評価を行うことは難しい。

しかしながら、使用層が拡大した後であっても、装飾須恵器が小規模墳から出土することがきわめて少ないことも事実である。1個体とはいえ装飾須恵器を有することは、ある程度のステータスを示す可能性がある。そのような視点で装飾須恵器を1個体出土した古墳を見ると、久礼田高松古墳は金銅装馬具を有する点で他の標準型石室墳と一線を画す。土佐では、金銅装馬具は限られた古墳にのみ副葬され、石室規模・長頸罐とともに古墳被葬者の階層差を示すという（耕家2007）。また、大元神社古墳は標準型石室の中では比較的大きな墳丘を有していた。明見彦山3号墳の石室規模が小さいが、この古墳は肥後型の系譜を引くと見られるので他の畿内系横穴式石室と単純に比較することはできない。よって、これを除くと、土佐では装飾須恵器が標準型石室の上位層以上に副葬された可能性が考えられよう<sup>(4)</sup>。

**総合的評価** 石室・墳丘・子持器台の副葬という限られた点からではあるが、大元神社古墳の、とくに階層的な位置を中心に評価を行った。筆者はこれまでに石室規模を中心として土佐の古墳を階層的に位置づけているが（清家2006・清家2007）、それにあてはめると標準型石室を持つ大元神社古墳は、河川や丘陵で区切られる領域を代表する地域首長墳ではないといえる。しかし、墳丘規模は比較的大きく標準型石室の中でも上位に来るものと思われる。この評価は装飾須恵器の副葬からも支持されよう。また、大元神社古墳の立地的な評価とも合致しよう。大元神社古墳は6基からなる前行古墳群の中でも、最も眺望の良い丘陵頂部に位置し、周囲の古墳を睥睨する場所にある。前行古墳群の中で最も優位な古墳であると言えよう。

すなわち、大元神社古墳は、地域首長の下でいくつかの小古墳被葬者を率いて古墳の存する楠目一帯を差配した小首長の墓と見なすことができる。

## 2 高知平野の古墳展開

前節で大元神社古墳の評価を行ったが、本古墳の調査が土佐の古墳研究にいかなる意味を持つかを考えてみることにしよう。そのために、まず高知平野の古墳展開についてあらためて概観してみるとことにしてしまう。

土佐の古墳築造については、これまでにも述べられるているとおり、古墳時代前・中期の築造は活発でなく、現在知られている同時期の古墳は十指で足る。土佐における古墳築造は古墳時代後期から盛んとなるが、その中でも数多くの古墳が後期後半から終末期に属する。後期前半には南国市長歟4号墳などの整穴系横口式石室が築造されるが、横穴系の埋葬施設を持つ古墳が盛んに築かれるのは香美市土佐山田町伏原古墳築造以降である。

伏原大塚古墳以降、すなわちTK209型式期に高知平野に横穴式石室を持つ古墳が点在する。その分布状況を分析した結果、大型石室を持つ古墳は、河川や丘陵などによって区切られた一定の領域に1~2基の割合で分布することが明らかとなっている(清家2006・清家2007、図37)。また、このことからそうした領域区分が存在し、大型古墳はそうした領域を治める地域首長墓としての性格を持つとした(清家2006)。また、特大型石室を持つ古墳は現在のところ岡豊にある小蓮古墳と、伏原大塚古墳の埋葬施設が横穴式石室だとすれば特大型になる可能性があるだけである。後者はTK43型式期、前者はTK209型式期であり、一時期には特大型は1基しか存在しないので、特大型は複数の地域首長を束ね、高知平野を代表する盟主的首長の墓であろうと考えたのであった(清家2006)。

伏原大塚古墳が小蓮古墳に先行し、伏原大塚古墳が盟主的首長墳であったとするならば、TK209型式期には盟主的首長墳が土佐山田から高知平野の中心地である岡豊に移動していることになる。つまり、盟主的首長の地位は安定しておらず不安定であるようすが高知平野では認められた(清家2007、表3)。

## 3 土佐山田における古墳展開と大元神社古墳

### (1) 土佐山田地域の細分

土佐山田の古墳を分析する上で先の論考に関わることで重要なことは、土佐山田地域の細分である。前稿では玄室面積10m<sup>2</sup>以上の石室を持つ古墳を大型古墳とし、大型古墳の分布からティセンポリゴンを作成した(図37)。ティセンポリゴンは丘陵・尾根・河川などの地形とよく適合することから、こうした丘陵と河川で区画される領域区分が存在したと考えたのである(清家2006)。土佐山田では伏原大塚古墳と新改横走古墳の存在から国分川(新改川)を挟んで南北に2分されたとした。国分川より北を新改地区、それより南側を伏原・楠目地区と仮称して分析を進めることにしよう。

## (2) 土佐山田の古墳分布

**伏原・楠目地区の古墳** 先述の通り伏原大塚古墳は、横穴式石室が高知に展開する契機となつた古墳であり、土佐山田町で最も古い古墳でもある。伏原大塚古墳についてやや詳しく見てみることにする。香美市土佐山田町百石町に所在し、一辺34メートルの方墳である可能性が発掘調査から示されている。1977年に行われた調査では、長さ7m・幅2mの礫敷きの埋葬施設が検出され、この埋葬施設は竪穴式石室であるとされた（廣田1984）。しかし、出土須恵器が時間幅を持つことや石室床面に礫が敷かれているなどの点から、横穴式石室を誤認したものだとされている（山本・岡本1991、土佐山田町1993）。とくに山本哲也と岡本健児は、1977年に検出された部分は横穴式石室の玄室であると考えている（山本・岡本1991）。この見解が正しいとするならば、玄室面積は14m<sup>2</sup>となるので、伏原大塚古墳の横穴式石室は特大型石室に分類されるこ

表3 高知平野における大型古墳の動向

	朝倉	一宮	岡豊	明見	高間原	土佐山田	
						新改	伏原・楠目
TK43							伏原大塚
TK209		(一宮大塚)	小蓮・舟瀬1号・舟岩3号・舟岩8号	(明見彦山1号)	(三ツ塚下)	新改横走	
TK217	(朝倉)						

凡例 ゴム印は特大型古墳、あるいはその可能性のある古墳。

( )付きの古墳は年代が不確実なもの。

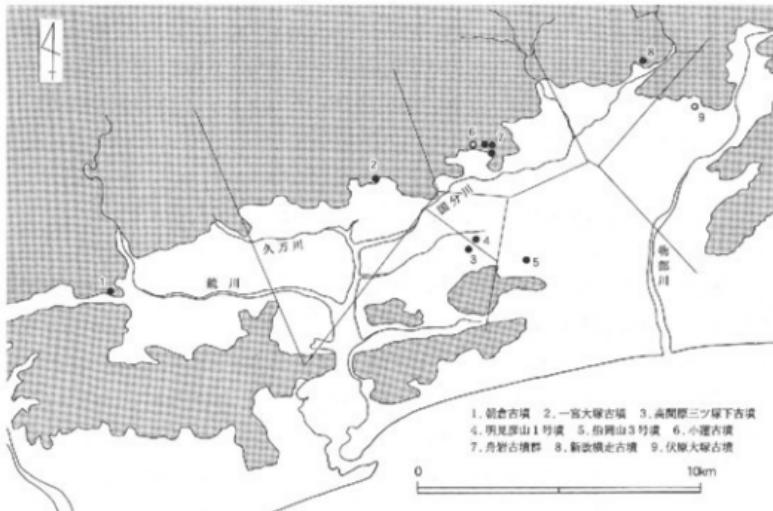


図37 高知平野の特大型・大型古墳の分布とティセンボリゴン

となる。すくなくとも大型の横穴式石室を内包していた可能性が高い。大元神社古墳を含む、伏原大塚古墳の周囲にある古墳も細長い横穴式石室であったので、伏原大塚古墳もまた横穴式石室であった蓋然性はより高くなつた。墳丘周溝から県下で唯一の埴輪が出土し、装飾須恵器を含む50点以上の須恵器・金銅装馬具・鉄鎌などの副葬品を持つ。1辺34mの方墳という数字が正しければ、これまた土佐の後期古墳としては最大規模を誇る。まさしく、横穴式石室墳が高知平野に展開する契機となつた古墳にふさわしい。

しかし、伏原大塚古墳に後続する古墳で伏原大塚古墳に匹敵する古墳は周囲に存在しない。その可能性があるものとして大元神社古墳があつたのであるが、先述の通り、墳丘こそ一定の規模を誇るが横穴式石室は標準型であった。大元神社古墳以外の古墳は正式な調査を経たものは少ないが、伏原・楠目地区にある小倉山古墳・須江ツカアナ古墳・前行山1号墳・上方古墳などはいずれもTK209型式期あるいはTK217型式期に属し、玄室面積が6～10m<sup>2</sup>の間に収まる標準型石室墳であった（表1、図35）。未知の古墳がまだ存在する可能性はあるものの、伏原大塚古墳以降は標準型石室墳がこの地区に散在している様子がうかがえよう。

**新改地区** 伏原・楠目地区に対してTK209型式期の新改地区には横走古墳が築造される。新改横走古墳は、直径15m程度の円墳とされ、玄室長6.6m・玄室幅1.9m・羨道長2.8m・羨道幅1.3mの横穴式石室を持つ。玄室面積は12.5m<sup>2</sup>で大型石室に属す。須恵器のほか、金銅装馬具・鉄鎌・刀子・耳環・玉類の副葬品が知られている。TK43型式期に遡る古墳は知られておらず、新改横走古墳の周囲に点在する西久保古墳・椎山1号墳などの古墳も横走古墳と同時期か、時期的に下る古墳がほとんどであろうと考えられる。

### （3）首長墳築造場所の移動

このように伏原大塚古墳以降の土佐山田においては、古墳展開が複雑である。伏原大塚古墳は上佐山田だけではなく、高知平野を代表とする豊主的古墳である。横穴式石室墳が高知平野に展開する端緒となる古墳であった可能性が高い。TK209型式期に至り、豊主的古墳は岡豊（小蓮古墳）に移動する（表3）。その後の土佐山田町では、伏原・楠目地区には地域首長墳と想定すべき古墳が見あたらず、小首長墳が散在する。一方、国分川を挟んで新改地区に横走古墳が築造されるのだ（表3、図35）。

このように有力古墳の築造場所が移動する背景には、いかなることが考えられようか。発掘調査はおろか精度の高い石室図面すら少ない土佐において、不確定要素は多いながらもいくつか仮説が提示できる。

一つは、横走古墳被葬者が国分川を超えて伏原・楠目地区一帯までも領域化した可能性がまず考えられよう。伏原・楠目地区には有力首長がTK209型式期段階には不在であり、新改横走古墳の下で伏原・楠目と新改地区が一体化した可能性を考えられよう。

また、領域の細分そのものも俎上に乗ろう。伏原大塚古墳が高知平野を代表する豊主的古墳

#### 44 土佐山田における古墳展開と大元神社古墳

であり、TK43型式期において土佐山田ではほぼ単独で存在した古墳であった。新改横走古墳はTK209型式期段階において土佐山田で唯一の大型石室墳である。このことから、ほんらい国分川の南北で領域を区分するのではなく土佐山田が一体の領域であり、1人の地域首長によって治められるべき領域であった可能性も考えられる。その場合であっても、伏原大塚古墳と新改横走古墳は約3kmも離れており、連続した首長墓であるとは考えがたい。大型古墳の築造場所が移動していることは重要な問題であり、地域首長権が一つの領域内で移動していることになる。

また、伏原大塚古墳に後続する未知の古墳が存在することも可能性の一つとして考えられる。新改地区と伏原・楠目地区はやはり別の領域であって、新改横走古墳と同時に伏原・楠目地区をおさめる首長が存在したというものである。

上記の諸仮説は伏原大塚古墳被葬者が高知平野を代表する盟主的首長であり、伏原・楠目地区を治める地域首長の役割を兼ねているとの見方に立つものである。伏原大塚古墳は高知平野を代表する古墳であるが、伏原・楠目の領域は個別的小首長や別の地域首長に委ねていたとの考えも成り立つ。

いずれの仮説も現段階ではどれが正しいとも言い切れない。ただ、いずれにしても、TK43型式期段階からTK209型式期段階において、盟主的古墳が土佐山田から岡豊に移動するという現象自体は、土佐において大きな政治的な変動を示すものである。伏原大塚古墳に後続する顕著な地域首長墳が周辺に見つからない現象は、盟主的古墳がかつて存在し、それが移動するという政治的状況とその変動下での作用として考えるべきであろう。

#### おわりに

本章では、大元神社古墳を土佐の古墳の中に位置づけ、楠目一帯をおさめる小首長墓として評価した。また、大元神社古墳を含めTK209型式期には小首長墓が国分川南部、伏原・楠目地区に散在するが、伏原大塚古墳の後継となるべき大型古墳が不在であることを指摘し、その背景について考察した。しかしながら、考察を通じて痛切に感じるのは当地の古墳調査があまりに少なく、情報が不足していることである。石室の図面や墳丘測量図もない古墳が少なからずある。分布調査も含めて古墳の資料化を計る必要を痛感する。この課題は高知県全体に及ぶものであり、そうした状況を少しでも改善できるよう努力したい。なお、本稿を執筆するに当たり小林麻由氏・久家隆芳氏からご教示を得た。心よりお礼を申し上げたい。

(この章すべて清家)

#### 注

- (1) 愛宕山古墳例は廣田1979a論文に記載されているが、小破片であるという。廣田論文は同資料の原典として

『高知小津高校研究誌』という雑誌を掲げているが、筆者はそれを入手していなかった。高知市葵泉寺愛宕山周辺には古墳が複数存在するので、同資料がいずれの古墳から出土したかを確認してから研究の俎上に上げたいと考える。

- (2) 廣田ほか1979cにある石室規模は誤りで、本稿の数字が正しい。
- (3) 大型石室である舟岩8号墳から子持器台片が出土しているが、個体数は不明である。ただ1個体であっても、複数個体の装飾須恵器は大型古墳以上に限られるという論旨には影響はない。
- (4) 廣田典夫(1979a)は、いわゆる巨石墳には装飾須恵器が副葬されないと述べた上で、小古墳群中にある「主となる古墳」に副葬されると指摘するが、このことと本稿の指摘は対応しよう。大型古墳に複数個体副葬されるという点で廣田論文とは異なるが、これは廣田論文が執筆された時点で伏原大塚古墳が未調査だったことと関係しよう。

#### 参考文献

- 岸本雅敏 1975 「装飾付須恵器と首長墓」『考古学研究』第22巻第1号 考古学研究会、岡山 : pp. 34-59
- 清家 章 2006 「まとめと若干の考察」『南国市における大型後期古墳の調査』高知大学考古学調査研究報告第3冊 高知大学人文学部考古学研究室、高知 : pp. 23-29
- 清家 章 2007 「高知平野における大型後期古墳の動向」『考古学論究－小笠原好彦先生退任記念論集－』真蔭社 : pp. 447-464
- 土佐山田町教育委員会 1993 「伏原大塚古墳」土佐山田町埋蔵文化財調査報告書第14集、高知
- 廣田典夫 1979a 「土佐の装飾須恵器」『土佐史談』124号 土佐史談会、高知 : pp. 23-31
- 廣田典夫 1984 「高知県土佐山田町大塚古墳」『古代学研究』第65号 古代学研究会、大阪 : pp. 24-28
- 廣田典夫 1991 「土佐の須恵器」四国考古学叢書2、高知
- 橋家 豊 2007 「高知平野における横穴式石室墳の系譜と階層構造」『海南史学』第45号 高知海南史学会、高知 : pp. 1-12
- 山田邦和 1998 「須恵器生産の研究」学生社、東京
- 山本健也・岡本健児 1991 「高知県」近藤義郎編『前方後円墳集成』中国・四国篇 山川出版社、東京 : pp. 438-439

#### 遺跡出典

- 大元神社古墳：本書、小倉山古墳：廣田典夫ほか1979b『土佐山田町史』土佐山田町教育委員会、鏡野学園前古墳：廣田ほか1979b、上改田古墳：廣田ほか1979b、上方古墳：岡本健児1968『高知県史』考古編 高知県、桜ヶ谷1号墳：廣田1979b、椎山1号墳：廣田ほか1979b(前掲)、須江ツカアナ古墳：土佐山田町教育委員会2002『須江ツカアナ古墳』土佐山田町埋蔵文化財発掘調査報告書第20集、前行山1号墳：廣田ほか1979b(前掲)、西久保古墳：廣田ほか1979b、西ノ内1号墳：廣田1979b、2号墳：岡本健児1968『高知県香美郡土佐山田町西ノ内二号墳発掘

調査報告書『高知県文化財調査報告』第9集 高知県教育委員会、伏原大塚古墳：廣田1984(前掲)・土佐山田町教育委員会1993(前掲)、舟岩古墳群(3号墳・8号墳)：岡本健児1968『高知県舟岩古墳群』高知県文化財調査報告書第15集 高知県教育委員会、明見彦山3号墳：廣田真夫ほか1979c『南国市史』上巻 南国市、横走古墳：廣田ほか1979b(前掲)、雪ヶ峯1号墳：廣田ほか1979b。このほかに各古墳出土須恵器については廣田1991(前掲)を参考にした。

## 第V章 まとめ

3年にわたる調査成果について、前章までに詳しく報告したところである。依然として不明な点もいくつかあるが、墳丘・石室について基本的な内容を明らかにできたと考える。その成果と課題をまとめてみる。

**墳丘** 墳丘に5箇所のトレンチを設定し、2トレンチ(拡張区)・3トレンチ・5トレンチで周溝とその外に巡る平坦面を、1トレンチと4トレンチで地山の落ち込みと平坦面を検出すことができた。周溝は墳丘の北から東部にかけて巡り、平坦面は古墳をほぼ全周して墳丘の端を画していた可能性が高い。周溝と平坦面の標高は約63~64mであり、この高さの等高線をみれば、円弧を描いている箇所が多いことから円墳の可能性がきわめて高い。これらの遺構を通る円を描くと直径約18mの円墳が復元できる。石室部分が大きく削平されているので古墳の最頂部の高さは不明であるが、現状の最高点は標高66.550mである。少なくとも古墳の高さは2.5m以上あったことになる。

また、崖面調査区ならびに石室調査区の周囲の壁面調査により、墳丘の大部分が盛土で形成されていることも判明している。

**埋葬施設** 石室部分は古くに破壊されてその内容が明らかでなかった。残念ながら破壊の程度はすさまじく、原位置をとどめる石室石材は存在しなかった。表面に露出していた石材も移動あるいは倒れてきたものであった。しかし、石室破壊時に残された地山の段差から、当古墳の石室が、短い羨道を有し、細長い長方形の玄室を持つ畿内系横穴式石室であったと推測されたことは重要である。石室破壊時の地山の段差を根拠としているので、あくまで参考程度であるが、玄室長4.3m以上・玄室幅1.3m以上・羨道長1.0m・羨道幅80cm以上と推測された。

この結果は、同じ土佐山田にあって高知県最大の古墳である伏原大塚古墳の埋葬施設の形態にも影響しよう。同古墳の埋葬施設は、発掘当初細長い竪穴式石室との想定がされたが(廣田1984)、その後、竪穴式石室と報告された部分は横穴式石室の玄室部分ではないかとされている(山本・岡本1991、土佐山田町1993)。伏原大塚古墳に近接する大元神社古墳石室の形状は、伏原大塚古墳の埋葬施設を考える上で参考になろう。

**出土遺物** 石室調査区から出土した須恵器は大元神社古墳の時期をほぼ確定した。蓋杯や脚部が2段の高杯の存在から本古墳はTK209型式期に築造されたと考えられる。子持器台はそれよりもやや新しいと考えられるので、およそ7世紀初頭に築造され7世紀前葉まで使用が続いたと考えられる。その子持器台は、高知県では5例目であり、全容が判明するものとしては3例目である。装飾須恵器研究ならびに石室内土器祭祀に関する重要な資料を得たと評価できよう。

石室調査区からは古代から近世に至る土器・陶磁器も出土している。この中にはミニチュアと推測される土器も含まれており、古墳が古墳人の埋葬・葬送の場として機能しなくなった後、祭祀場所として新たに機能した可能性を示している。このことは、大元神社がこの地に勧請されるに至った経緯と神社の起源を考える上で重要であろう。

**今後の課題** 大元神社古墳の墳形・規模と埋葬施設の形態についてはおおよその情報を得ることができ、大元神社古墳の評価もある程度行うことができた（第IV章）。しかし、土佐山田における首長墳の動向や古墳間の関係については依然明らかでない点が多い。そのことについても前章で触れたので繰り返さないが、この問題を解明していくためには古墳の基礎資料を整備していく必要を感じる。土佐山田は土佐でも有数の古墳分布地帯であるだけに、さらに多くの古墳の調査が必要であろう。これらの古墳との関係を今後整理し、当地での首長間関係を問うていく必要がある。今後の検討課題としたい。

大元神社古墳の調査を始めて4年。高知大学が高知の古墳調査を始めて5年経つ。高知の古墳研究はまだ緒に就いたばかりである。小さな一步を積み重ねて、高知の古墳研究を進展させ、ひいてはその成果を地域に還元したいと願っている。

（この章すべて清家）

#### 参考文献

- 廣田典夫 1984「高知県土佐山田町大塚古墳」『古代学研究』103号 古代学研究会、大阪：pp. 29-33  
土佐山田町教育委員会 1993『伏原大塚古墳』土佐山田町教育委員会調査報告第14集、高知  
山本哲也・岡本健児 1991「高知県」近藤義郎編『前方後円墳集成』中国・四国編 山川出版社、東京：pp. 438-

# 図 版



(1) 古墳の立地



(2) 調査前の状況

図版 2



(1) 1トレンチ (東から)



(2) 1トレンチ (西から)



(3) 2トレンチ (南から)



(4) 2トレンチ (北から)



(1) 3トレンチ（西から）



(2) 3トレンチ（東から）

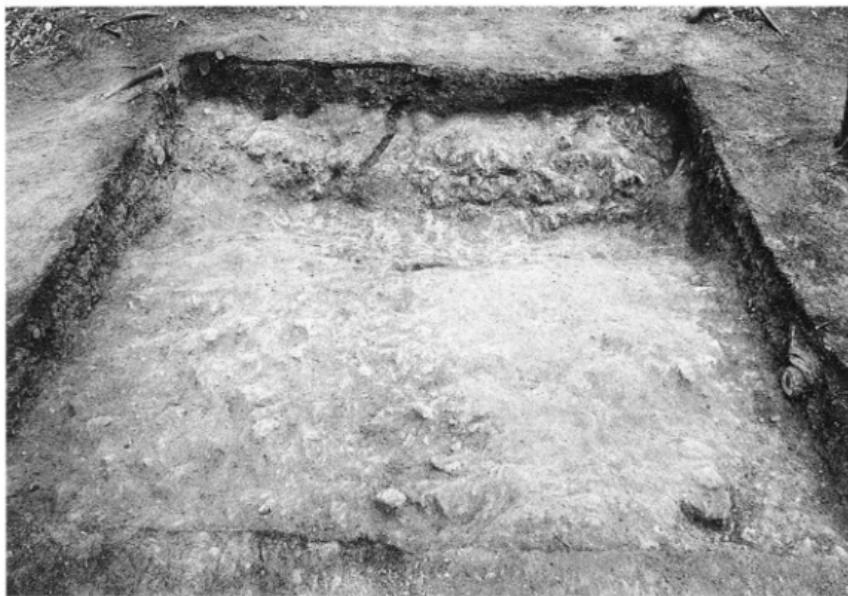


(3) 2トレンチ検出溝（西から）



(4) 3トレンチ検出溝（北から）

図版4



(1) 2トレンチ拡張区（北から）



(2) 2トレンチ拡張区（南西から）



(1) 4 トレンチ (南東から)



(2) 4 トレンチ (北西から)



(3) 5 トレンチ (南西から)



(4) 5 トレンチ (北東から)

図版 6



(1) 石室調査区全景(西から)



(2) 石室調査区(南から)

